資料

（平成二十七年十二月）

第六十回「合宿教室」（富士）感想文集

――日本人としての自覚をもとめて――

公益社団法人　国民文化研究会

第六十回　〝合宿教室（富士）〟　全参加者の感想文と短歌詠草

とき　平成二十七年八月二十九日（土）から九月一日（火）まで三泊四日間

ところ　静岡県御殿場市「国立中央青少年交流の家」

参加総数　百十五名

目　次

〝はしがき〟に代へて……理事長　今林賢郁…2
大学別参加者数・その他の人数の内訳……4
〝合宿教室〟60年の歩み……5
〝合宿教室〟の日程表（三泊四日）……7
第60回〝合宿教室〟のあらまし……8
走り書きの〝感想文〟と第二回目の〝短歌詠草〟……参加者全員…25
合宿中に創作された「短歌詠草」……参加者全員…77
あとがき……92
カメラ・レポート21枚（27ページから67ページの左頁に掲載）

〝はしがき〟に代へて

公益社団法人　国民文化研究会理事長
今林賢郁

昭和三十一年（一九五六）に設立された本会は今年六〇年を迎へました。鹿児島県の霧島神宮で第一回が開催されて以来、節目の六十回を迎へた今年の「合宿教室」は、八月二十九日から九月一日の三泊四日の日程で、静岡県御殿場市「国立中央青少年交流の家」に於いて開催致しました。同地での開催は平成十一年、十三年、十五年に続く四回目となりました。今年は生憎と合宿期間中ほぼ毎日の雨模様となり、朝日に映える富士山を仰ぎ見ることができなかったのは残念なことでした。

「時代の転換期に生きる私たちは、どう生きるべきか。日本はどうあるべきか！」をテーマに掲げて、ひとりひとりがそれぞれの日々の生活から一歩踏み出し、日本人としての自覚と誇りを求めて過ごした数日間でした。日常の生活とは違ふ緊張感も必要とされましたが、参加者全員が心身を傾けて取り組んだ三泊四日間となりました。

招聘講師としてお迎へした長谷川三千子先生は、『三種の神器の謎を解かう！』と題する講義を、「神話」が歴史、小説、単なる昔話、聖典や経典など、それらのいずれとも違ふものであり、神話とは、高森明勅氏の言葉を引用されながら、「神話は民族の原初的な想像力が生み出した、世界の意味を解読するための物語」「神話はそれぞれの文化の原核をおのずから映しだすもの」であると説明され、次いで、『古事記』と『日本書紀』の特色と共通点、『記』『紀』のテーマ、更に三種の神器はいかなる意味を担ってゐるのかについて話を進められ、特に「鏡」については、くもりのない、清明な心で正しいことは正しいとされた天照大神のみ心をいつも心に留めて生活すべしといふことが、極めて具体的、道徳的に示されてゐると説かれました。

内部講師として登壇した本会会員諸兄も、それぞれのテーマに基づき心をこめた講義を展開してくれました。「よりよく生きるために―『教育勅語』を思ひ出さう」と題する講義では、杉浦重剛が当時満十三歳の皇太子裕仁親王（のちの昭和天皇）に御進講した記録『倫理御進講草案』の授業内容にも触れながら、今をよりよく生きるための指針として、あらためて『教育勅語』を思ひ出さうではないかと呼びかけました。「古典は楽しい 小林秀雄『本居宣長』」では、江戸時代の「学問の豪傑」が取り組んだのは「古典への信を新たにする」ことであり、「古典の完璧な価値を信じ、新たな感動を付与した」と述べ、小林秀雄は「知

る事と感じる事が同じであるやうな全的な認識」を説いたと説明し、感ずること、感動することの大事さを語りました。更に「御製に仰ぐ天皇のお心と日本の国柄」では、「国安かれ、民安かれ」と神々に祈られるご歴代の天皇のお心を御製にたどり、またわが国の皇室と国民の関係を示すものとして「民と偕に楽しむ」（孟子）といふ言葉を引用し、明治天皇、昭和天皇の御製を紹介しながら、天皇と国民の共感の世界こそ日本の国柄であると語りかけました。

このやうな講義を参加者は一心に聴き、班別討論の場では講義の資料を皆で読み味ひながら友の話しに耳を傾け、自分の疑問や思ひを語り、また「和歌創作」では、自分が思ったこと、感じたことを三十一文字に表現するといふ作業を多くの参加者がはじめて経験し、更に、「戦時平時を問はず、祖国日本のために尊い命を捧げられた全てのみ魂」をお迎へした「慰霊祭」も執り行ひました。このやうな日程が進んでいく中で、参加者は次第次第に自分が日本人であることを体験的に把握し、自国の現状と将来に思ひを馳せ、また友との語り合ひの中で、心からの友情も醸成されていったやうに思はれます。

この「感想文集」は合宿最後の帰り際に「走り書き」で書かれたもので、充分意をつくされたものではありませんが、精魂を傾けて過ごした合宿での思ひを率直に書き留めてくれたものです。紙面の都合で全文を載せられないのが残念ですが、ご精読賜りますれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、この合宿教室を実施するにあたり、今年もまた、各界からお寄せせいただいたご支援に対し、会員一同に替り心から厚く御礼申し上げます。

来夏（平成二十八年）の「第六十一回合宿教室」は、左記の通り東日本、西日本の二ヶ所で開催する予定です。

●東日本…九月二日（金）～九月五日（月）の三泊四日、
静岡県御殿場市「国立中央青少年交流の家」

●西日本…八月十九日（金）～八月二十一日（日）の二泊三日、
福岡県福岡市「さわやかトレーニングセンター福岡」

両地区の詳細な合宿案内は三月頃を予定してをります。多数の皆様のご参加をお待ち致します。

第60回全国学生青年合宿教室（平成27年8月29日～9月1日）　於「国立中央青少年交流の家」

参加者

（学生班）（算用数字は参加学生数）

早稲田大学1　日本大学1　専修大学1　國學院大學2　明星大学1

皇學館大学1　埼玉大学1　立命館大学1　京都産業大学1

甲南大学1　広島大学1　福岡大学4　九州工業大学1

中村学園大学2　九州産業大学2　福岡教育大学1　佐賀大学2

ニューヨーク大学1　予備校生1

計　二十六名（うち女子五名）

（社会人参加者）　十五名（うち女子九名）

（招聘講師）　一名

（国民文化研究会）　六十九名

（事務局）　一名

（見学者・慰霊祭協力）　三名

総計　一一五名

―“合宿教室”60年の歩み―

回数	年　度	開催地	参加人員	主　　要　　講　　師
1	昭和31年	霧　島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福　岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐　賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿　蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲　仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲　仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿　蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲　仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜　島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大　分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲　仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿　蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧　島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿　蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲　仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧　島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿　蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲　仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧　島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿　蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲　仙	332	木内信胤・衛藤瀋吉・高木尚一
23	〃 53年	阿　蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧　島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲　仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿　蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧　島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲　仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿　蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿　蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島　原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿　蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・關正臣
33	〃 63年	島　原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島　原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿　蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚　木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿　蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥冨修一
38	〃 5年	厚　木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿　蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚　木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道

回数	年　度	開催地	参加人員	主　　要　　講　　師
41	平成８年	阿　蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃　９年	厚　木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村總一郎
43	〃　10年	阿　蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎
44	〃　11年	富　士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
45	〃　12年	阿　蘇	154	小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義
46	〃　13年	富　士	150	伊藤哲夫・長谷川三千子・小野吉宣
47	〃　14年	江田島	244	中西輝政・山内健生・青山直幸
48	〃　15年	富　士	171	小堀桂一郎・伊藤哲夫・占部賢志
49	〃　16年	阿　蘇	169	中西輝政・小田村四郎
50	〃　17年	伊　勢	219	長谷川三千子・松浦光修
51	〃　18年	霧　島	191	井尻千男・吉田好克・占部賢志
52	〃　19年	奈　良	175	小堀桂一郎・小川三夫・小野吉宣
53	〃　20年	伊　勢	150	伊藤哲夫・占部賢志
54	〃　21年	厚　木	160	長谷川三千子・ペマギャルポ・占部賢志
55	〃　22年	阿　蘇	151	中西輝政・小柳左門
56	〃　23年	江田島	141	小堀桂一郎・山内健生
57	〃　24年	阿　蘇	152	竹田恒泰・小柳志乃夫
58	〃　25年	厚　木	142	伊藤哲夫・國武忠彦
59	〃　26年	淡　路	108	中西輝政・小柳左門
60	〃　27年	富　士	115	長谷川三千子・小柳志乃夫
累計・参加人数			14,817 名	

（公社）国民文化研究会・大学教官有志協議会　主催

平成27年　第60回全国学生青年“合宿教室”日程表　（富士）

8月29日（土）	8月30日（日）	8月31日（月）	9月1日（火）
	起床（6：00）	起床（6：00）	起床（6：00）
	(6:30) 朝の集ひ	(6:30) 朝の集ひ	(6:30) 朝の集ひ
	(7:00) 朝の集ひ（交流の家主催）	(7:00) 朝の集ひ（交流の家主催）	(7:00) 朝の集ひ（交流の家主催）
	(7:20) 朝食	(7:20) 朝食	(7:20) 朝食
	(8:30) 講義 三種の神器の謎を解こう！ 埼玉大学名誉教授 長谷川三千子先生	(8:30) 講義 御製に仰ぐ天皇のお心と 日本の国がら 小柳志乃夫先生	(8:15) 清掃 (8:45) 合宿をかへりみて 国民文化研究会理事長 今林賢郁氏 (9:20) 全体感想自由発表
	(10:00) 質疑応答 (10:30) 写真撮影 (10:50) 班別研修	(10:00) 班別研修	(10:00) 地区別懇談 (10:40) 感想文執筆 第二回短歌創作 (11:30) 閉会式 （挨拶）主催者代表 国民文化研究会副理事長 澤部壽孫氏 合宿運営委員長　伊藤俊介氏 (12:30)
受　付：　13:00　開始	(12:00) 昼食	(12:00) 昼食	閉会式終了(12:00)後、昼食・解散
(14:30) 開会式 （挨拶）主催者代表 国民文化研究会理事長　今林賢郁氏 オリエンテーション 合宿趣旨説明及び諸注意伝達 合宿運営委員長　伊藤俊介氏 合宿指揮班長　内海勝彦氏	(13:00) 短歌導入講義 青山直幸先生	(13:00) 学生体験発表 会員発表　高木雅史氏 (13:40) 創作短歌全体批評 折田豊生先生	
(15:30) 自己紹介及び班別研修 「日本への回帰 第50集」輪読	(14:00) 野外研修・短歌創作 「秩父宮記念公園」散策	(14:40) 班別短歌相互批評	
(17:00) 夕べの集ひ（交流の家主催）	(17:00) （短歌提出） 夕べの集ひ（交流の家主催）	(17:00) 夕べの集ひ（交流の家主催）	
(17:20) 夕食 入浴 休憩	(17:20) 夕食 入浴 休憩	(17:20) 夕食 入浴 休憩	
(19:30) 合宿導入講義 よりよく生きるために ー『教育勅語』を思ひ出さうー 山口秀範先生	(19:30) 古典講義 古典を楽しむ ー『本居宣長』（小林秀雄）ー 國武忠彦先生	(19:30) 講話 小田村初男先生 (20:00) 慰霊祭説明 實遵矢太郎先生 (20:30) 慰霊祭	
(21:00) 班別研修	(21:00) 班別研修	(21:30) 班別研修	
(22:30) 就寝	(22:30) 就寝	(22:30) 就寝	
(23:00) 消灯	(23:00) 消灯	(23:00) 消灯	

第六十回〝合宿教室〟のあらまし

第一日目

（八月二十九日・土曜日）

第六十回全国学生青年合宿教室は、富士山のふもと、静岡県御殿場市の「国立中央青少年交流の家」にて開催された。全国から集った参加者はそれぞれの思ひを胸に受付を済ませ、開会式に臨んだ。

開会式

福岡大学科目履修生の小林拓海君の開会宣言で合宿教室は幕を開けた。主催者を代表して今林賢郁理事長は「戦争には何ら関りのない、私たちの子や孫、その先の世代の子供たちに、謝罪を続ける宿命を背負はせてはならない云々の安倍首相の戦後七十年談話を二十歳代、三十歳代の若者の多くが評価する一方で、〝八月十五日〟が何の日かを知らない若者も多いといふ世論調査をどう見たらいいのか。自分らの世代、ひいては自分だけ良ければいいと考へてゐることの現れだとしたら寒心に堪へない。この合宿では、日常から一歩踏み出して、国のことに思ひを馳せ心を働かせて、何かを摑んで欲しい」と挨拶した。次いで伊藤俊介合宿運営委員長は「日本人としての自分自身を知らないが故に、他の文化に対し自信を持てないでゐるのではないか。国の伝統と日本人の生きてきた姿を学び、自分を見つめ直す切っ掛けとして欲しい」と呼びかけた。

合宿導入講義

「よりよく生きるために―『教育勅語』を思ひ出さう―」

㈱寺子屋モデル　代表取締役社長　山口秀範先生

「古今の名家に『家訓』があるやうに、我が国にはかつて『国訓』と呼べるものがあった。それは『教育勅語』で、明治二十三年から昭和二十三年まで、日本人がよりよく生きるための指針となってゐた」と講義を始められ、教育勅語を学ぶ格好の手引きとして、大正三年、当時満十三歳の皇太子裕仁親王（のちの昭和天皇）と五人のご学友に、杉浦重剛が「倫理」を授業した記録『倫理御進講草案』を紹介された。そして「父母に孝に」「朋友相信じ」「徳器を成就し」などの勅語の文章についての杉浦重剛の魅力あふれた授業を再現するべく解説を加へられた。

「倫理を御進講するに当って杉浦重剛は、①三種の神器と天壌無窮の神勅への理解②五箇条の御誓文を将来の標準とする③教育勅語を深く学ぶといふ三大方針を立てて皇太子のご人格形成に多大の影響を及ぼした」と語り、昭和二十一年年頭の「新日本建設に関する詔書」に触れられた。詔書の冒頭には「明治天皇明治ノ初国是トシテ五箇条ノ御誓文ヲ下シ給ヘリ」とあり、その後に御誓文の五箇条全文が引用されてゐる。「この趣旨は、昭和天皇が占領下の国民に『自信を失ふな。わが国は輝かしい歴史を持ってゐるのだよ』と諭されたものだと思ふ。しかもこの勅語には聖徳太子の十七条憲法のご精神が反映してゐる」と千四百年もの前から続く国柄にも言及された。

最後に「よりよく生きようとするには、縦につながる日本の精神の中にそれを求めることが大切だ」と結ばれた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義についての班別研修を行った。講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかったこと、重要なことは何かを確認し、その上で各々の思ふことを論じ合った。なほ、この班別研修は、以後の各講義の

後にも行はれた。緊張のせゐか、始めのうちは意見も少なく発言も限られてゐたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も活発となり、班員相互の交流が深められていった。

第二日目　（八月三十日・日曜日）

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。本合宿では全日程を通し生憎の雨と霧で、朝日に映える美しい富士の山容を仰ぐことが叶はなかった。合宿参加者による「朝の集ひ」は講義室（四日目は講義棟下部の戸外）にて行った。簡単な体操の後、北九州市立医療センターの森田仁士氏による唱歌の歌唱指導を受け、合唱した。唱歌は次の通りである。

二日目（八月三十日）「ふじの山」「箱根八里」
三日目（八月三十一日）「われは海の子」「冬の夜」
四日目（九月一日）「虫の声」「紅葉」「村の鍛冶屋」

講　義　「三種の神器の謎を解かう！」

埼玉大学名誉教授　長谷川　三千子　先生

先生はまづ「神話」に関して次のやうに説明された。「歴史は史料に即して確かめることが出来なければならないが、神話はそれが出来ない」。小説との違ひについては「小説はある一人の作者が創作するもので神話には作者はゐない。ゐるとすれば民族全体である」。さらに「昔話や伝説は神話と似てはゐるが、昔話には色々なエピソードは語られてゐても、神話のやうにこの世の秩序がどのやうにして形成されたかは語られてゐない」。聖典や教典との差違については「旧約聖書を神話といふ人もゐるが、教義の書であるからその内容を疑ふ信者はゐない。神話は我々を縛るものではなく、その内容を自由に楽しむことが出来る」。

続いて『古事記』と『日本書紀』の伝へる神話の特色と共通点について、「両書とも大筋では同じ物語になってゐて漢字が使はれてゐるが、『古事記』は日本語の音を漢字を使って表し、『日本書紀』は中国語としての漢字（漢文）で書かれてゐる」。そして、この両書の内容をどう読んでいったらいいのかについて、高森明勅氏（神道学者）の「どのような部分にも、全体を貫くテーマは響き渡ってゐる」旨の言葉を引用され、日本の神話のテーマは何かについて具体的に『古事記』の文章に触れながら説明された。

「西洋の神は宇宙が創造される以前から存在し永遠に存在してゆくが、日本の神々は次々に生成して〝並独神（みなひとりがみ）と成り坐して身を隠したまひき〟と『古事記』は伝へてゐる。その冒頭に〝天地初めて発けし時〟とあるやうに、天と地といった空間的な区別があって、それがいかにして統合されてゆくかが大事なテーマである。天照大神は自らの御孫に〝三種の神器〟を授けて地上に送り出されたが、それらの神器がいかなる意味を担ってゐるのか」と述べられて、勾玉と鏡が登場する天の石屋戸の物語のくだりを説明された。剣については、高天原を追はれた須佐之男命が大蛇を退治しその中から取り出して、天照大神に献上されたものであるが、「このことは天と地の統合、和解が成立したことを意味してゐる」と話された。

特に鏡については「天照大神は〝これの鏡は、専ら我が御魂として、吾が前を拝（いつ）くが如（ごと）拝き奉（まつ）れ〟と言はれたが、わが身を見る度に、いつも天照大神のお顔を思ひ浮かべ、清明で正しいことを正しいとされた厳かな大神の御心を仰ぎつつ、日々を過すべしとの意味合ひがある」と説かれた。わが国の神話は皇室の最も大切な「原核」を映し出し、表現してゐると話されて講義を終へられた。

短歌創作導入講義

三菱地所㈱　青山直幸先生

まづ「日本人は、古代から短歌を歌ひ交すことによって、心を磨き、情意を育んで来た。短歌は心を豊かにする〝人生表現のよるべ〟である」と述べられた。続いて、東日本大震災で被災した人々の短歌を紹介され、「未曾有の被災体験と亡くなった大切な方々への鎮魂の思ひや叫びが赤裸々に表現されてゐる」と語られた。そして、復興に立ち上がった人々の思ひに心を寄せて詠まれた皇后陛下の御歌「今ひとたび立ちあがりゆく村むらよ失せたるものの面影の上に」を拝誦された。

次に、短歌創作の基本姿勢として、「詠まうとする対象に焦点を絞って、正確に心に感ずるままに詠むことが肝要」と説き、一首一文、字余り・字足らず、連作等について例示しながら、わかり易く説明された。

さらに「写実」の好例として、橘曙覧が銀山で働く鉱夫達の姿をリアルに詠んだ連作や、明治四十三年、潜水訓練中に殉職した潜水艦の佐久間艇長以下十四名を詠んだ与謝野晶子の鎮魂歌を紹介して、「感じたことを正確に詠まう」と説かれた。

野外研修（短歌創作）

短歌創作を兼ねた野外研修は、御殿場の地にご縁のあった大正天皇第二皇子の秩父宮雍仁（やすひと）親王殿下（昭和二十八年薨去）のご別邸跡地である「秩父宮記念公園」で行はれた。この公園は、昭和十六年九月から約十年間、秩父宮両殿下がお過しになったご別邸を、勢津子妃殿下が平成七年八月に薨去された際のご遺言により御殿場市にご遺贈され、その後整備して平成十五年に開園した。

小雨が時折降る中、地元のガイドの案内で園内を巡り、その後、思ひ思ひに散策しながら、短歌の創作に打ち込んだ。園内には、

茅葺のご別邸が残されてゐて、宮様が大東亜戦争終結（昭和二十年八月十五日）の玉音放送をお聴きになったといふお部屋なども公開されてゐた。近くには防空壕もあって、緊迫した当時の様子を拝察することとなり、宮様のお気持ちをお偲びすることにもなった。

古典講義

「古典は楽しい　小林秀雄『本居宣長』」

昭和音楽大学名誉教授　國武忠彦先生

「小林秀雄は、多様で複雑な人間を、科学的な客観的な分析的方法で捉へようとする現代思想から抜け出すことは容易ではないと言った。感動と観察を切り離す不自然な事はしないとも言った」と講義を始められた。「古典は、ある時代にあったがままで長生きするのではない、私たちが読んで回復しようと努力しなければ甦（よみがへ）らない」と語られた。

次に、宣長の物まなびの力は「楽しむ」にあった。大好きな桜に真向ふやうに対象と完全に融合することにあった。「楽しむ」力は、『論語』の一般的な解釈まで文句をつけてゐると説かれた。また、「江戸時代の中江藤樹、契沖、荻生徂徠、賀茂真淵たちは学問界の豪傑だと小林秀雄は言ったが、彼らが取り組んだことは、〝古典への信を新たにする〟ことで、宣長は『源氏物語』に〝物のあはれ〟を発見し、『古事記』を甦らせた」と言はれ、「古典の完璧な価値を信じ、新たな感動を付与した」と力説された。「伊藤仁斎は、『論語』『孟子』を沈潜反復して読み、孔孟の咳払ひを聞き、心の底を見た。宣長は契沖によって〝目ガサメタ〟。古言は、当時の人々の古意と離すことが出来ない。古歌や古書に当時のあったがままの姿を直にみなければならない」と語られた。

最後に「和歌も物語も〝アハレノ一言ニ帰ス〟といふ。〝あはれ〟とは、〝ああ〟といふ感動の言葉である。感ずるとは〝動也（うごく）〟、すなはち感動である。〝ああ〟とゆれ動く人の心の発見である。小林秀雄は〝知る事と感じる事が同じであるやうな全的認

識〟を説いた」と述べられた。

第三日目　（八月三十一日・月曜日）

講義

「御製に仰ぐ天皇のお心と日本の国柄」

興銀リース㈱　小柳志乃夫　先生

初めに、「歴史の連続性への認識」が危ふくなってゐるとの福田恆存先生のお言葉を紹介され、百二十五代に及ぶ「歴代天皇の歴史」の図表を掲げて、連綿たる御系譜に意を向けるべきと語られた。次いで江戸時代の櫻町天皇から今上天皇に至る歴代御製を取り上げて、時代毎に国家的試練の内容は区々なものの、「国安かれ、民安かれ」と一心に神々に祈られるお心が一貫してゐることを指摘された。それは、光格天皇の後櫻町上皇あてのお手紙の「身の欲なく天下万民をのみ慈悲仁恵に存候事、人君なるものの第一のおしへ」といふお言葉の通りであり、中でも列強が開国を迫って国論が分裂した幕末の孝明天皇の悲痛な祈りと、身を顧みず国民を守らんとされた昭和天皇の終戦時のお心とを御製にたどられた。

また、わが国の皇室と国民の関係に相応しい言葉として「民と偕に楽しむ」といふ孟子の言葉を吉田松陰の『講孟余話』から引いて紹介され、明治天皇の「國民の業にいそしむ世の中を見るにまされる楽はなし」、昭和天皇の終戦直後の皇居勤労奉仕者を詠まれた「をちこちの民のまゐ来てうれしくぞ宮居のうちに今日もまたあふ」などの御製をエピソードを交へて紹介され、「この天皇と国民との共感の世界こそ日本の国柄である」と語られた。

最後に、神事と共に皇室が大事にされた和歌の世界、所謂「しきしまの道」について、明治天皇の御製を手掛かりにしてたどられ、それが「まごころをうたひあげたる言葉」や「言葉の上にあふれる人の心のまこと」をかけがへのないものとみる道であり、

それはまた、「おもふことうちつけにいふ」「すなほなるをさな心」に通ずるものであることを説かれた。そして、歴代天皇のお歌に拝される世界は、神に向って祈られるまごころと照応するものであることを示され、講義を結ばれた。

学生発表

日本大学法学部　三年　名和長高君

昨年から参加してゐる國武忠彦先生のご指導の小林秀雄著『本居宣長』の読書会において感じ学んだことについて語った。「歴史とは、ただ出来事を調べるものではなく、出来事を経験した人間の精神や思想を残された言葉によって、自らの心に思ひ出すことだといふことを学んだ」と語った。

会員発表

㈱ロゼッタ　高木雅史氏

初めて参加した合宿の短歌相互批評の際、「年上の大先輩が一年生の私に対して、真剣に付き合ってくださった姿勢が強く印象に残った」と述べ、「真剣に付き合ふとは、短歌の作り手の気持ちにより添はうとすることだと思ふが、この体験が寮生活でも役立った」と学生時代の寮生活を振り返った。「社会人となって十年が経った現在も、この付き合ひが続いてゐて苦しい時の支へになってゐる」と語り、「合宿で心底からつき合へる友を見つけ下さい」と語った。

創作短歌全体批評

熊本市役所　折田豊生先生

冒頭、「昨夜、『歌稿』（全参加者の短歌が各人一首以上印刷されて綴じ込まれた冊子）を交響曲を聴く思ひで読んだ。夫々の素材について多くの人が様々な思ひを詠んでをり、多くの目で見ることの事実確認の多様さと確かさに改めて気づかされた。この『歌稿』は、他の人の歌と自分の歌を比べて、独りでも相互批評ができる最良のテキストである」と述べられた。

参加者全員に配布された「歌稿」の中から幾つかを取り上げながら、思ひを正確に伝へるためにはどのやうな表現が適切か等々、添削例を示し、「再度自ら推敲し自分自身を見詰め直してほしい」と語られた。最後に「相互批評の要点は作者の思ひをよく聴くことであり、この後の班別相互批評では互ひに知恵を出し合って、作者の気持ちに添ふ表現に近付けていくとき、互ひの心が自づと一つに溶け合ふ瞬間が訪れると思ふ。そのやうな素晴らしい交流の時間となることを願ってゐる」と結ばれた。

班別短歌相互批評

全体批評のあと班別短歌相互批評が行はれた。自分の心の動きを正確に表現し相手に伝へることの難しさ、また人の言はんとしてゐることを正確に受け止めることの難しさを実感させられた。一首一首の短歌を、班員全員が納得できる表現にするため尽力し、時間を超過してしまふ班もあったが、その分自分の心、相手の心をじっくりとみつめるといふ貴重な体験をすることが出来た。

講話

「『花燃ゆ』と小田村伊之助」

元皇宮警察本部長　小田村　初男　先生

ＮＨＫで放映中の大河ドラマ『花燃ゆ』に登場する小田村伊之助について、至誠の人といはれる生き方を紹介された。「伊之助は、安政の大獄で江戸へ送られることになった吉田松陰から『孟子』の〝至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり〟を験してくるとの言葉を託され、以後の松下村塾を任された。そして明治維新後、群馬県令となり、教育と産業振興に尽力し、名県令と讃へられてゐる。特に欧化思想に侵され真の教育がなされてゐないことに憂慮し、道徳の教科書『修身説約』全十巻を編纂発行した。これは全国のベストセラーになった」と語られた。

慰霊祭

斎行に先立ち元山口県立高校教諭寶邉矢太郎先生から、慰霊祭斎行の趣旨と祭儀の手順が説明された。慰霊祭の趣旨について、「この祭儀は慰霊祭といふ一つの儀式を通して私達の心をととのへ、戦時平時を問はず国のために尊いいのちを捧げられた全ての祖先のみ霊をお迎へし、その方々が後の世の人に遺されたお気持ちをお偲びし、私達もまた受け継いでゆきたいとの思ひをこめた祭儀である」と説かれた。

慰霊祭は祓詞（はらへことば）に代へて山口秀範常務理事による三井甲之の「ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」の朗詠に始まり、小柳雄平会員による御製拝誦、池松伸典会員による祭文奏上とつづき、次いで参加者一同で「海ゆかば」を奉唱した。

左は拝誦された御製と、奏上された祭文である。

御製拝誦

明治天皇

をりにふれたる（明治三十七年）

たたかひに身をすつる人多きかな老いたる親を家にのこして

をりにふれたる（明治三十七年）

世とともに語りつたへよ國のため命をすてし人のいさをを

鏡（明治三十八年）

國のためいのちをすてしもののふの魂や鏡にいまうつるらむ

馬（明治四十年）

人ならばほまれのしるし授（さず）けましいくさのにはにたちしあらこま

天（明治三十七年）

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな

昭和天皇

松上雪（昭和二十一年）

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

戦災地視察（昭和二十一年）

国をおこすもとゐとみえてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

東北地方視察（昭和二十二年）

あつさつよき磐城の里の炭山にはたらく人をををしとぞ見し

広島（昭和二十二年）

ああ広島平和の鐘も鳴りはじめたちなほる見えてうれしかりけり

光（昭和三十五年）

さしのぼる朝日の光へだてなく世を照らさむぞわがねがひなる

今上天皇

沖縄平和祈念堂前（平成五年）

激しかりし戦場（いくさば）の跡眺むれば平らけき海その果てに見ゆ

姿（平成九年）

うち続く田は豊かなる緑にて実る稲穂の姿うれしき

月（平成十九年）

努め終へ歩み速めて帰るみち月の光は白く照らせり

静（平成二十六年）

慰霊碑の先に広がる水俣の海青くして静かなりけり

本（平成二十七年）

夕やみのせまる田に入り稔（みの）りたる稲の根本に鎌をあてがふ

祭文

美しき富士の裾野に広ごれる高原の中「御殿場国立中央青少年交流の家」に打ち集ひ　公益社団法人　国民文化研究会理事長　今林賢郁はじめ百十余名　第六十回全国学生青年合宿教室を営みて　はや三日目の夜を迎へぬ

今し天つ日はかくろひ　さやかなる涼風に秋の気配を感ずる　今宵　平成二十七年八月三十一日　「多目的室」を斎庭と定めまつり　祓ひ清めまつりて　とこしへにみ国守ります　遠つみ祖たちをはじめ　み国のために尊きいのちを捧げ給ひしあまたのはらから達　亡き師　亡き友らの御霊をお迎へして　みたまなごめのみ祭り　仕へまつらむとす

顧みれば昭和天皇の御聖断によって　先のみ戦は収められし後　占領政策による日本文化伝統の破壊に　やまとしまねの危ふきことを憂ひつつ　明治天皇はじめ歴代天皇の御製に　また聖徳太子のみ教へに　われらの行くべき指標を求め　営みきたりし合宿教室も　はや六十年の歳月を重ねり

しかれども我が国の政治・教育・マスコミ各界の混迷は　いよいよ深まり　自虐史観は全国津々浦々の国民にまではびこり　み祖らの尊きみ教へも　解りがたく見えがたくなりゆきにけり

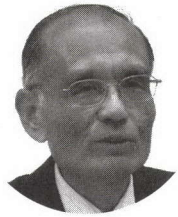
今ここにわれらは　長谷川三千子先生をはじめ　諸先生のご講義に耳を傾け　班別討論・古典輪読　はたまた短歌創作に友らと心を開き語り合ひ　残されしみ言葉を心込めたどりて　われらのいのちは　み祖らのいのちにつらなりてあるを覚ゆ老いも若きももろともに　心を鍛へ言葉を修め　祖国日本を　とことはに栄えゆかしめんと誓ひまつらむ

天にますみ祖のみ霊よ　願はくは我らのゆくてをまもらせたまへと　第六十回全国学生青年合宿教室参加者一同に代り

池松伸典　謹み敬ひ恐み恐みも曰す

第四日目　（九月一日・火曜日）

合宿をかへりみて



今林賢郁理事長は、初日の導入講義から、長谷川三千子先生の御講義、短歌創作、古典講義、御製を仰ぐ講義までの全日程を振り返った。「そこに共通するものは、この日本といふ国は一体どういふ国なのか？といふ問ひかけではなかったか。各人においては反発もあったかも知れない。そこを学びの出発点にして欲しい。ただし、知識だけではなく、自分の身に浸み入るやうな勉強をして貰ひたいと強く思ふ。自分自身の言葉で語れる学問に取り組まうではないか。かうした勉強を続けることによって〝自信〟といふものが生れてくる。この自信はこの日本の国に愛着を持つことと同じことである」と切々と語りかけた。

また、「今年年頭の感想で今上陛下がおっしゃったやうに、近現代史、特に満州事変以後の日本の歴史を学んで欲しい。〝謝罪〟などといふことを跳ね返すやうに歴史を自分自身のこととして学んで欲しい」と語り、「〝自立〟すること、自分の足で立つといふ自信を作り上げよう。その意思と気概が大事で、この合宿で皆様の心に少しでも届いたものがあれば、ありがたい」と言葉を結んだ。

全体感想自由発表

この合宿で学んだことは何か、気づかされたことは何か。これからどう学ばうとしてゐるか。率直な感想が途切れることなく次々に発表された。

「初参加で緊張したが、皆に溶け込め大変勉強になった」「長谷川三千子先生の神話の話に感動した。これからも学んで行きたい」

「御製を通して、天皇のご存在の意義を知った」「人に寄り添ひ、おほらかで、素朴な宣長の心を垣間見た」「短歌の相互批評で一人一人の歌を皆で考へ、心を通はせ合ふ体験が出来た」「国や歴史について学び、日本人としての幸せの根底は何かを感じた」「熱意ある講義を通して、古典に触れる共感の力を学んだ」「祖父や先達から学び、日本をもっと深く知りたい」「御製を通して民の喜びを喜びとする、君民一体の国柄を学び、日々の仕事に真剣に取り組むことがそれに繋がることを学んだ」「戦後、見失ったものに改めて気づかされた、是非この体験を世に広げて行きたい」「十七条憲法から教育勅語へとつながる縦の流れとそれを生かす横の関係を学んだ」「友とのつながりを続けたい」「古典が歩み寄ってくるやうな、輪読をしてみたい」など様々な感想が率直に発表された。

閉会式

開会の時から続いてゐた雨雲がやうやく晴れゆく中、閉会式は始まった。主催者を代表して澤部壽孫副理事長が「友と共に心を働かせながら学問を重ねて、真っ直ぐに生きて行って欲しい」と挨拶し、続いて伊藤俊介合宿運営委員長は「自分から何かを発信し周りの人から意見をもらふことが、自分の姿を写す鏡となる」と前向きに生きようではないかと訴へた。参加学生を代表してニューヨーク大学アブダビ校教養学部二年の鈴木茉莉菜さんは「大学で日本のことを悪く言はれても反論出来なくて悔しかった。日本の歴史や思想を正しく身に付けて、自分が選んだ道を進みたい」と決意を語った。最後に皇學館大学文学部二年の江崎義訓君が声高らかな閉会宣言を行って、第六十回全国学生青年合宿教室の全日程を終了した。

合宿運営

【本　部】

運営委員長　FTIコンサルティング　伊藤　俊介
副運営委員長　西松建設㈱　蔭山　武志

【指揮班】

指揮班長　㈱IHIエアロスペース　内海　勝彦
指揮班　元神奈川県立小田原高校教諭　原川　猛雄
若築建設㈱　池松　伸典
㈱寺子屋モデル　横畑　雄基
伊佐ホームズ　小柳　雄平

【事務局】

事務局長　国民文化研究会事務局長　奥冨　修一
事務局協力　国民文化研究会副理事長　栗方恵美子
元川崎重工業㈱　澤部　壽孫
元㈱講談社　山本　博資
元三菱重工業㈱　磯貝　保博
北九州市立医療センター　島津　正數
IMSグループ本部　森田　仁士
元㈱アルバック　最知　浩一
㈱ラック　北濱　道
高橋俊太郎

【慰霊祭協力】

根上　久野

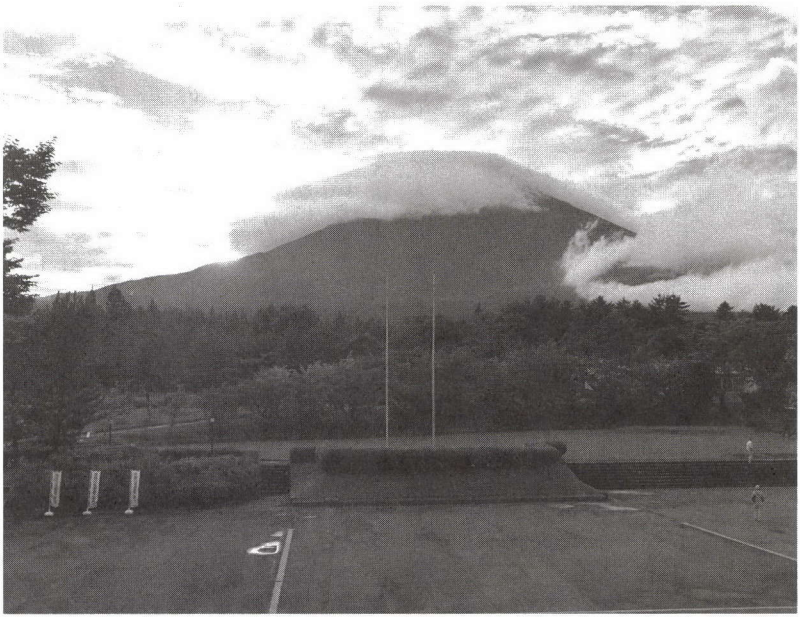
【見　学】

松村　希一
末永　直

走り書きの〝感想文集〟

これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、三泊四日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣い」は原文のままで掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる短歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものです。



第一班―男子学生―

十年ぶりの合宿での感動

（㈱ロゼッタ　高木雅史　34歳）

大学卒業以来約十年ぶりに合宿に参加いたしました。社会人になってからは裏方として参加をする機会が多く、また、自分の怠惰によるものもあり講義を身を入れて聞くのも学生時代以来のことだったかと思います。先生方のご講義を聴き、自分たちが長い日本の歴史に連なっていてそれがどれほど尊いことであるかを頭ではなく心で感じる体験を十年ぶりにすることができたと感じています。また、今回学生班に入りましたが、学生たちも先生方のご講義を素直に心で受け取っていたように思います。これを機にそれぞれが学問を続けていってもらえればと思います。

十年ぶり富士の裾野で学びたる大人らの教へ胸に響き来

大きな意味をもった合宿

（埼玉大学　経　三年　佐藤勇気）

初めての参加でしたが、元々問題関心に近い方々が集まっているということもありとても楽しく終えることができ、また知り合った方々とは今後も共に勉強していけるご縁をいただけて大変有意義な時間となりました。まず全ての講義の中で共通していた、すなほなる心を重視することへの熱意が、日本の精神の伝統であるということが、よくわかりました。日本の不完全さを愛する心が古事記にもよく表われていて、より深く学びたいと思いました。和歌にも初めて深く触れましたが、その奥深さにのめり込みそうです。

班の友との交流を通して感じたことは、心の師をもつことで方向性が定まるということです。目標があれば自ずと志も定まり、学問は生きた学びになるのだろうと思います。同時に師から学べるのはなにも知識だけではなく、その人の考え方、姿勢、心構えという何事にも通じる生き方の指針だと思いますので、この合宿はそうした意味でもまだ目標の決まらない友人達にとって大きな意味を持ったのではないかと思いました。

師を持ちて高みを見つつ追はむとすれば自づと志定まらむ
我が鏡磨きてくもりなかりせば写る世界は明瞭ならむ
我が国のまもりしすなほなる心もちて求むる道を進まむ
天皇の祈りと民の感謝とが交はり合へば国護らるるべし
学問は問はねば血肉とならざらむ持つべき心かまへはかくあれ
連綿とつづく歴史のただ中で過去とつながる自己に気付けり

改めて気付いた短歌の難しさ

（日本大学　法　三年　名和長高）

この合宿で初めて短歌をじっくり考へることができました。二日目の野外研修後の短歌創作は、一首詠むのにも苦労し、最後に一首詠むことができました。翌日の合宿三日目に行はれた相互批評では、私が詠んだ短歌の中に複数の感情が含まれてをり、分けた方が良いのではないかといふ事を言はれ、自身では気付かなかった部分に気付く事ができ、大変勉強になりました。また、短歌の難しさを改めて知り、もっとうまく詠めるやうになりたいと思ひました。もっと勉強してきたいと思ひます。

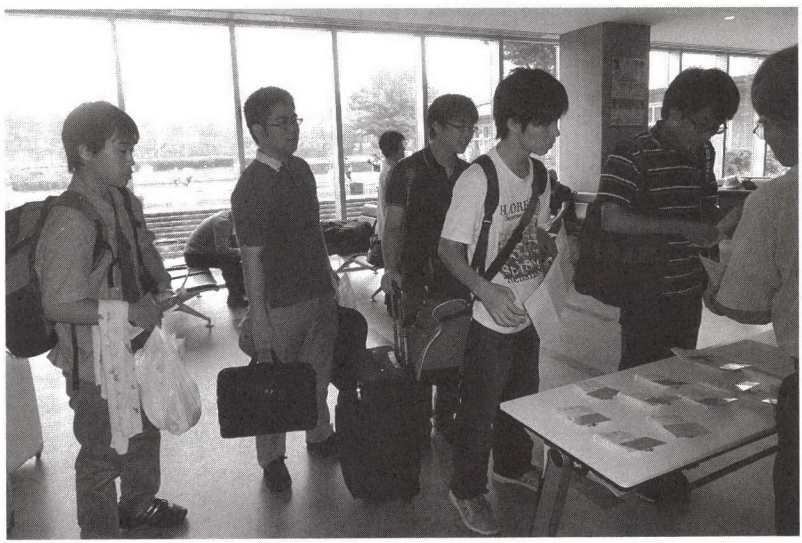
御殿場に集ひて学び深めたる合宿もつひに終はりたるかな

小林秀雄への愛とも言ふべき語り口に引き込まれる

（立命館大学　法　二年　小野寺崇良）

私は普段、政治や憲法が専門で、勉強もさういった内容しかしてゐなかった。しかしこの合宿に参加し、日本の文化、脈々と受け継がれてきた、御皇室の民を思ふこころを感じさせていただいた。大日本の国體とはまさにここに現はれてゐるのだ、ここに我が国を建国から現在まで貫き通す根本があるのだと学ばせてもらふ良い機会であった。

また、印象に残った講義としては、二日目の夜の國武忠彦先生のものである。先生の小林秀雄を思ふ心、愛とも言ふべきその語り口に引き込まれた。小林秀雄は名前しか知らず、読んだ事はなかったが是非とも学んでみたいと思ふ。今後は



全国から集った参加者はそれぞれの思ひを胸に受付を済ませ、開会式に臨んだ。

憲法だけでなく、その中心を貫く国體、我が国の根本を学ぶ事もしっかりやりたい。

日の本の受け継がれたるみ思ひを同志と学びし忘れがたき日

國武忠彦先生のご講義で変わった神話への思い

（佐賀大学　文化教育　二年　藤近晃久）

私は今回の合宿まで、神話というものがどこか自分とかけ離れたフィクションのようなものに感じていました。話としては聞くのですが、どうにも自分自身と結びつかず、神話を学ぶ必要性を感じず、学びたいという意欲が生まれませんでした。しかし國武忠彦先生のご講義を受け、少し自分の意識が変わったように思います。本居宣長は自分の人生を、古事記に捧げられました。私がどこか離れたものとして感じていた神話に熱中し人生をかけた先人がいたということを知り、私も先人がそれほどまでに感銘を受けた神話を知っていきたいと思えるようになりました。本居宣長にとって、自身の基軸となり心をつかんで離さない「古典」とは、神話そのものだったと感じました。また國武先生が生き生きと小林秀雄について語られる姿を見て、國武先生にとっての小林秀雄というのも、心の中で息づく「古典」なのだなと感じました。

自らの心をつかむ古典求め狂ふがごとく本を読みたし

短歌を書き終えたあとのうれしさとすがすがしさ

（京都産業大学　経営　一年　船岡龍一）

今回は全国学生青年合宿教室に初めて参加させて頂きました。誰の紹介というわけでもなく、不安な気持ちでこの御殿場までやってきました。しかし、導入講義や講義の後の班別研修で気持ちもほぐれて、同じ班員の方々と仲良くなれたのがとてもうれしいことでした。今の大学生活では、祖国日本について語り合うということもなく、今回の合宿はその場をやっとみつけたというような心持ちでした。関西での勉強会にもさそっていただいて、これからも日本のことや自分の生き方なんかをじっくりと考え、議論していきたいと思います。また、今回はじめて短歌を詠みまして、それを全体批評の場でとりあげていただき、具体的なアドバイスをもらえて非常にためになりました。感動を素直に表現するということがいかに難しいかを実感しつつも、書き終えた後のうれしさとすがすがしさというのも素晴らしいことだと思いました。

御殿場の地で見つけたりし友たちよ再び会はむ合宿教室

心で感じる

（熊谷拓也）

僕は最初緊張していたが国歌斉唱でこんなに大きく歌うのかと感動したのを思い出します。合宿を通じてとくに面白か

った話は古典講義で、分からない自分でも何かを感じたような気がしてこれが心で感じるのかなと思い、合宿で得たことを体感してこれからに活かせたらと思います。

合宿の学びについて今思う素直に生きる美しさかな

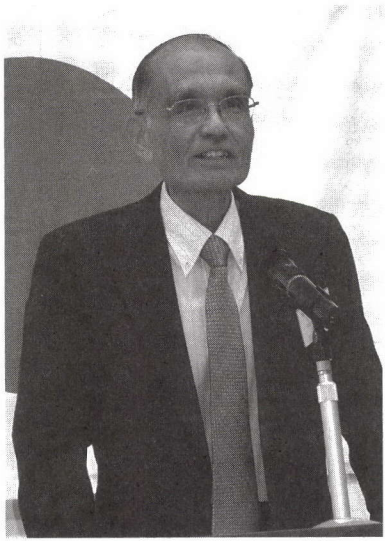
参加前はただただ嫌な気持ちだった合宿教室

（福岡大学　経　一年　匹田己晶）

私は今回が合宿教室への初めての参加でした。今回参加したきっかけは大学で福大寺子屋塾に参加していてそこで山口秀範先生のご紹介により参加しました。私は偉人のことなどまったく知らず参加したので講義にでてくる人物の名前やその人物が行ったことなどわからずにいたのですが、講師の方々の熱い講義によりおおまかではあるのですが理解することができました。班別研修でも知らないことが飛びかっていたのですが班員の方々が説明してくださったおかげで理解することができ新たなことを知ることができました。参加するにあたって私は大学側からの強制的な合宿教室に気が向かず、ただただ嫌な気持ちだったのですが、合宿教室の三泊四日を過ごしていく中でこの合宿教室で新たな知識や今まで踏み込んだことのない場所を経験することができたのでとても貴重な経験でした。

知識なく参加してみる研修に皆の声にて理解深まる

カメラ・レポート・2



開会式。福岡大学科目履修生の小林拓海君（右）の開会宣言で合宿教室は幕を開けた。主催者を代表して今林賢郁理事長（左）は、この合宿では、日常から一歩踏み出して、国のことに思ひを馳せ心を働かせて何かを掴んで欲しいと挨拶した。

名講義が続いた合宿

（興銀リース㈱　小柳志乃夫　61歳）

山口秀範先輩の気迫あふれた導入講義に始まり、長谷川三千子先生の東洋において心は鏡でなくてはいけないとのお話、國武忠彦先生の我々は「ああ…」で生きてゐるといふお言葉、折田豊生先輩の短歌の修練の意味は誤りなく御製を受け止める力を養ふ点にあるといふ御指摘等印象に残る名講義であった。

講義準備のため運営への関与について随分甘えさせて頂いた。伊藤俊介運営委員長の一年間のご努力感謝したい。高木雅史君の発表にあったやうな若き日からのつきあひの連続の中に心知る友らとの運営体制が繋がれてきたことは素晴らしいものだと思ふ。在京の班員諸君とは今後もつき合っていきたい。富士山の姿が見えぬことがただ一点惜しい合宿であった。

全体感想発表にて

合宿を続けませしことに謝するとふお言葉有難く聞きまつりけり

合宿に来ざれど長き年月をそを力にし戦ひこしと

若き日に教へたまひし師の姿見えぬがさびしと語りたまへり

○

六十の年にむちうち過酷なる指揮班の任務をつとむる友らは

（内海勝彦兄、池松伸典兄、森田仁士兄）

秋田なる友も合宿に参加すと演題の書を見つつ過ごしき

函館ゆ葉書たばりし先輩のお心たふとしと偲びまつりつ

第二班―男子学生―

何を守るのかが理解された

（崇城大学非常勤講師　白濱　裕　63歳）

久々に学生班の班長を担ふことになり戸惑ったが、班付の岸本弘さんの助けを得ながら、適宜、学生が司会を分担するなど、全員が主体的にこの合宿に取り組んでゐた。

今回の合宿は、天皇と御製についての御講義で、国民の安寧をひたすら祈ってこられた歴代天皇方の御心に直に触れることができ有り難かった。時事問題へ直接言及した講義は少なかったが、国防や安全保障に関しても、何を守るのかといふ根本的な問に、歴代天皇を始め幾多の先人が、まさに「かなしきいのちをつみかさね」守ってこられたこの国体を守るためなのだといふことが、参加者にも身に沁みて理解されたと思ふ。

運営面では、広大な敷地で、生憎の雨も重なり移動に不便を感じたが、ほぼ予定時間通りにスムーズに進行し、伊藤俊介運営委員長、内海勝彦指揮班長をはじめ、委員諸兄の献身的なご努力に感謝申し上げる。

班員諸兄へ

をちこちに別れゆくともこの地にて結びし縁あに忘れめや

和歌朗詠に感銘した

（國學院大學大学院　文学研究科　二年　島岡昇平）

初参加といふこともあり緊張しましたが、大変充実した合宿生活を送ることができ、感謝致してをります。先生方のご講義を拝聴するだけではなく、毎講義後に班別研修が設けられ、そこで各自が講義内容について語り合ひ、問ひかけあふといふ形式は新鮮でした。皆と理解を共有する喜びが得られました。

慰霊祭においては、特に「和歌朗詠」に感銘を受けました。和歌朗詠を修祓の祓詞に代へることを当初は不思議に思ってをりましたが、参列してみて、これは和歌の言霊による祓ひであると思ひました。

「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」の歌に込められた三井甲之先生の思ひ、そしてこの歌を拝誦してきた先人の思ひによって言霊がはたらき、参列者が祓はれてゐるのでせう。合宿全体を通じて、御製をはじめとして和歌を大切にする国文研の学風が印象的でした。

慰霊祭

先人のいのりの歌をとなへられ夜の斎庭辺清められたり

班別研修

班友にたすけられつつ討論の司会つとめしつたなきながら

カメラ・レポート・3

オリエンテーション。伊藤俊介合宿運営委員長（右）は、国の伝統と日本人の生きてきた姿を学び自分を見つめ直す切っ掛けとして欲しいと呼びかけた。内海勝彦合宿指揮班長（左）は、合宿生活を営む上での諸注意を説明した。

教育勅語に立ち返ろう

（佐賀大学　聴講生　吉岡勝也）

今回初めて合宿教室に参加させていただいて、学ぶこと感じることが多くあった。同じ班の中には始めて短歌を詠む学生がいたが、そのような学生の歌の方が飾り気がなく素直な思いを言葉にしていると感じた。私は多少の経験があるために、言葉をいい加減に使っていたり良く見せようという気持ちが心の中にある事に気づかされた。短歌を詠む姿勢が傲慢であった。初心に戻って、素直な思いを心とぴったりとくる言葉で表す努力をしていこうと思えた。また、山口秀範先生のご講義を受けて、昭和天皇が敗戦後に明治天皇の五箇条の御誓文に立ち返られたように、憲法改正が問われている今日、我々が立ち返るべきものとは何か考えさせられた。その一つが教育勅語であると思う。これからさらに古典、教育勅語を学びながら、国訓とは如何にあるべきか深めていきたいと思う。

雨傘を忘れた僕は合宿中ずっと誰かと相合傘なり

感動を自分の言葉で語りたい

（福岡教育大学　教育　聴講生　前川大基）

今回の合宿で、心に残ったのが、講演される先生方の熱意です。それぞれ語り方は違いましたが、古典に心を動かされた経験を素直に表現されているように感じ、感動を自分の言葉で素直にぶつけることができる自分でありたいと思いました。小柳志乃夫先生がご講義の中で紹介された昭和天皇の御製、「よろこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆきいまはななそぢ」を詠み、大東亜戦争で多くの国民を失ったことへの悲痛なる思いと、君民一体の世界があったことを感じ、心が温かくなりました。

そして、今回学んだのは、このような天皇陛下と国民の関係のように、学問界の豪傑達は「古典への絶対なる信」のもと、先人（古典）の心に共感し、一体になろうと努力されてきたのだということです。私も感動を自らの言葉で瑞々しく語れるよう精進します。

感動を己の言葉で語らるる先生（うし）の姿を心に刻まむ

「成長」を実感できた

（福岡大学　経　四年　福岡　潤）

四日間の合宿であったがあっという間に過ぎていったというのが正直な感想である。当初、私はこの合宿に来ることに乗り気ではなかった。大学生活でも殆ど歴史に触れることはなかったし、何より小さい頃から社会が大の苦手だったのだ。合宿に来てみて、見事にその予感は的中した。最初の班別研修の輪読会では何も理解することが出来なかった。何より他の班員が普通にその内容を理解し意見しているという事実が一層自分の無力さを露呈させた。しかし、日程が進むにつれ

興味があることも少しずつ増えていった。それは、きっと先生方の熱心な講義があったからだと思う。二日目の夜には話す友だちもでき、班別研修では少しずつではあるが、意見する事もできるようになっていた。これ程短期間で「成長」することができたのは初めてだったように思う。

富士の山雲がかかりて見えねども私の心は晴れわたりけり

心と心の交流が図れた

（國學院大學　神道文化　三年　横川　翔）

講義中はどういうわけだが、眠くて仕方がなかった。先生方のご講義がつまらなかったというのではもちろんない。夜更かしをしていたというわけでもない。眠るまい眠るまいと思いつつ、お話しされている先生の顔を必死に見つめた。しかし、結局は眠りに落ち、数分ほどして我に返ると「しまった」という思いが湧き起こり、たちどころに目がさえるのであった。

例年がどうかまでは深くは知らないが、今年は文学調の講演一色であった。昨年は、中西輝政氏の政治に関する講義があったが、班別研修でもそれに類した話題は殆ど出てこなかった。しかし、班員同士の心と心の交流を図る上ではかえって議論が上滑りにならず都合がよかったのではないかと思った。

霧に雨富士の御山はこの四日つひに見えずに終はるといふか

カメラ・レポート・4

合宿導入講義。㈱寺子屋モデル社長 山口秀範先生は、皇太子裕仁親王（のちの昭和天皇）に杉浦重剛が御進講申し上げた「倫理」の授業を、その魅力そのままに再現されるかのやうに活き活きと説いてゆかれた。

視野が狭かった

（九州産業大学　商　三年　下田幸美）

今回、合宿を体験して思ったことは、一つ一つの物事に対する考えがとても深いということです。今まで、自分自身が見ていた視野がどれだけ狭かったのか痛感しました。また、合宿では御製など聞いたことがない単語が飛び交い、理解するのに時間がかかりました。

講義では、元々の学力が足りないと言うことをとても思い知らされました。そのため、班別研修の際に分からなかったことや疑問に思ったことを聞きました。班の人が詳しく説明してくれ、講義で先生が言われたことが少しずつ分かりました。班の人達とは仲良くすることができ、さらに、自分には見えていなかった所の話を聞くことによって、今から自分が何をすべきか少し分かったような気がします。

雨上がり合宿地での最終日友との別れ寂しかりけり

和歌をもっと学びたい

（皇學館大学　文　二年　江崎義訓）

私が今回の合宿で最も感動したのは、小柳志乃夫先生の「御製に仰ぐ天皇のお心と日本の国がら」というご講義だ。昨年は、小柳左門先生の「明治天皇の大御心を仰ぐ」という御講義に一番感動した。

私は、御製を拝誦し、歴代の天皇様のお心を知るたびに涙が溢れてくる。その理由は自分でもよく分からないが、きっと和歌のリズムに天皇というご存在の有り難さに心が反応するからだろうと思う。

昨年、小柳左門先生のご講義を拝聴して「私ももっと和歌を学ばねばならない」と決意したが、この一年間まじめに取り組んでこなかった。次の合宿までの一年間は学びの一年として、より力を付けてこの合宿に臨みたいと思う。

神の道共に歩まむと学舎を移しし友の姿見えざる

大御心仰ぎて涙こぼるるはそのまごころのありがたさゆゑ

合宿は年に一度の禊

（元富山県立富山工業高校教諭　岸本　弘　70歳）

今回の合宿に参加するに当たり、いろんなことが思ひ返されました。その中の一つに、故関正臣先生がよく仰ってゐた「合宿は自分にとって年に一度の禊である」といふお言葉がありました。自分にとってもこの合宿がさうあってほしいものだと願ってをりましたが、一つ一つの御講義の中に、また班別研修の中に、ハッとさせられるものがいくつもあり、しみじみと関先生のお言葉を思ひ返すことになりました。

この合宿に始まったわけではありませんが、ここのところ日本の国の事を考へますと、いろいろなことが昭和天皇の御存在、ご苦労と結びつくやうに思はれてなりません。今の陛

下のお気持ちもまたそこに発するもののやうに推察申し上げるのです。記紀万葉そして聖徳太子の御精神を、また、諸々の先人の知恵を取り統べて、なつかしい大切な道を示してゐる教育勅語を、本当に誇るべき規範だと思ひました。

この雲の彼方に富士の峰ありと心に描き過ごせり四日を
隠るる日しるく見ゆる日我らゆく道も御山の姿に似たり

第三班―男子学生―

学生班班長として参加して

（折尾愛真短期大学　松田　隆　59歳）

昭和三十一年に第一回が開催されしこの国民文化研究会の夏季合宿に、昭和三十一年生まれの私は、絶対にこの第六十回の合宿には参加しなければならないと言う気持ちで以って参加致しました。

今回も昨年同様に学生班班長として参加し、班員の学生が七名と、学生数が昨年よりも多かったのですが、皆良くまとまり、特に初めて参加した学生から的を得た質問（「現在の国訓とは何ですか。」と言う質問）が出たことには驚き、また嬉しく思いました。

只、残念なことは合宿の間、雨天の為に富士山の御姿を拝むことができなかったことと、数年ぶりに会えた班友と話を

カメラ・レポート・5

埼玉大学名誉教授長谷川三千子先生は、三種の神器のうち特に鏡について、天照大神は〝これの鏡は専ら我が御魂として吾が前を拝(いつ)くが如拝(なぞへ)き奉(まつ)れ〟と言はれたが、鏡に映して自分の顔を見る度に、いつも天照大神のお顔を思ひ浮かべ、清明で正しいことを正しいとされた厳かな大神の御心を仰ぎつつ日々を過ごすべしとの意味合ひがある、と説かれた。

する時間を持てなかったことが残念でした。

全国学生青年合宿教室に参加して

久々に合宿で会ひたる友見つけ昔の思ひ出蘇へるなり

久々に会ひたる友と語らひの時を持てずに心残れり

教育勅語における「縦の繋がり」と「横の繋がり」

（専修大学　経営　四年　芦田和久）

今回で三回目の参加となる国文研合宿に参加させていただき学んだことは、「縦の繋がりと横の繋がりを意識する」ということだった。

我が国では、十七条憲法と言う千年以上前の憲（のり）が受け継がれ、その憲（のり）が五箇条の御誓文、そして教育勅語へと現されている。

これは皇祖皇宗より伝わる御皇室の縦の繋がりであり、また教育勅語を天皇様が国訓としてしろしめし、御自らその国訓を率先され、国民と思いを一つにしようとされた広い横の繋がりであると私は学んだ。

そしてその学びによって、横の繋がりとしての日本人としての生き方を見つめ直してゆき、教育勅語の言う修身を意識し、自立した日本人となるのが私の生きる目標の一つとなった。

それと共に縦の繋がりとして、芦田家の家訓を再興したいと思う。これが芦田家の斉家としての私の生きる目標でもあり、そして、公としての治国平天下を目指し、日々学びを行ってゆきます。

教育勅語の御講義を受けて

身を修め世に自らの足で立つ揺るぐことなき桜の如く

天皇陛下の御存在

（福岡大学　科目履修生　小林拓海）

私にとって合宿教室は、一年を通して学ぶテーマを得ることのできる場です。昨年からのテーマとして、「天皇陛下とは、日本人にとって、私にとってどのやうな御存在なのか」といふものでした。昨年の合宿教室で、天皇陛下の御製を読んだとき、常に日本の民と世界の安寧を祈られてゐることを学びました。私たちのことを常に想はれてゐると考へるとそれだけでありがたく温かい気持ちになります。

今回の合宿教室では、小柳志乃夫先生が、「偕楽と言ふ言葉は、日本の皇室と民との関係を表してゐると思ふ」と仰ったことが印象に残りました。天皇陛下が私たちのことをお想ひ下さるやう、私たちも天皇陛下のことを想ふ。その関係がまた、陛下の喜びであり、私たちの喜びであることが私の中にスーっと落ちてきました。

昭和天皇御製

戦（たたかひ）にやぶれし後の今もなほ民のよりきてここに草とる

をちこちの民のまゐ来てうれしくぞ宮居（みやゐ）のうちに今日もまたあふ

この御製やほかの多くの御製を味はひ、私自身の言葉で、

多くの方に伝へて行きたいと思ひました。

友人と机を囲み話し合ひ講義の感動深まりにける

合宿教室で感じ得たもの

（早稲田大学　政経　四年　北林裕教）

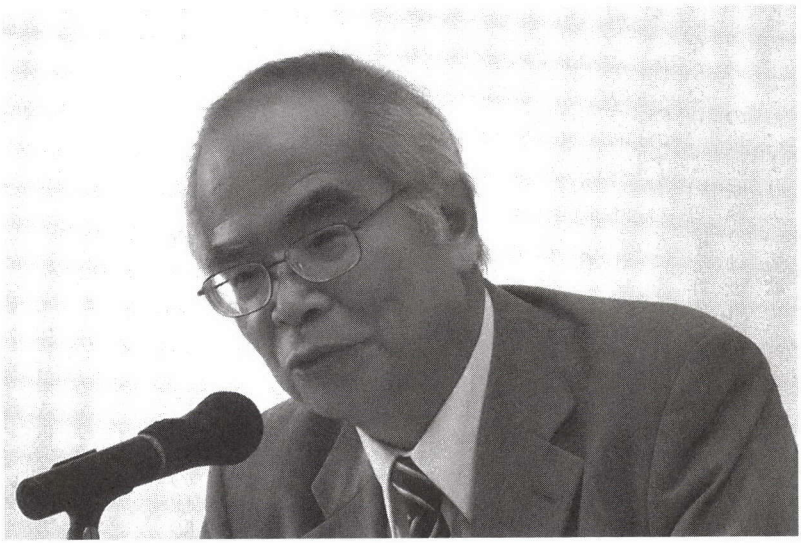
今回の合宿に参加できて、率直に良かったと思ふ。さう思ふのはこの合宿で大きく二つのものを得られたからである。

一つ目は、短歌相互批評を通じて班友と、まごころを交はしあへたと心から思ったことである。私が表現したいことを私と共に悩み、私が表現できず伝へられない思ひを理解しようと努めてくれる姿に、私は非常に感動した。

合宿の間のみの付き合ひで留めるのではなく、今後も付き合ひを続けたいと思った。さう思へたのは今回の合宿が初めてである。

二つ目は、今の学問に対する考へを少し変へられたことである。これは國武忠彦先生の御講義で感じられたが、その御講義の冒頭で「科学的と言ふ現代思想」と言ふ小題が有り、現代の大学の在り方そのものを問はれたやうに思ひ、非常に衝撃的で、今まで何となくあった大学の学問に対する違和感をズバリと言ひ当てられた気がして、非常に新鮮であった。講義を受けて、数ある書物の中でもとりわけ古典に対しては「自ら歩み寄る」姿勢で著者の声に耳を傾けねばと思ひ、さう思ったとたんに、それまでどこか冷淡に感じてゐた学問が、

カメラ・レポート・6



短歌創作導入講義。三菱地所㈱ 青山直幸先生は、短歌創作の基本姿勢として、詠まうとする対象に焦点を絞って、正確に心に感ずるままに詠むことが肝要、と説かれた。

何か温かいもののやうに感じられ、この気付きが私にとって何よりの収穫であったと思ふ。

今回の合宿で得たものを今後忘れることなく更に発展させていき、自らの学問の幅を広げたいと思ふ。

班別短歌相互批評にて

我が想ひを知らむとすなる班友のあくなき努力有難きかな

連綿と続く日本国の伝統・文化を誇りに感ずる

（広島大学　経　四年　野田　巧）

今回初めて合宿に参加して、とても素晴らしい貴重な体験をすることができた。合宿導入講義の山口秀範先生の御講義では、教育勅語という現代に生きる私たちにはあまり関わりがないことばから、さまざまな思いを学ぶことができ、また、現代の国訓は何なのかということを考えさせられた。

そこで、合宿全体を通して現代の国訓は何かという答えが分かった気がした。先人の思いやことば、考え方などを学ぶことによって自分自身の価値観を点検することができ、教育勅語だけでなく、聖徳太子の憲法十七条から昭和天皇の詔書に至るまで古来から長く、日本の国の伝統、文化が続いてきたことを誇りに感じた。ここで学んだこと、知ったことを自分のことばで語ることができるように、これからさらに学んでいきたい。講義の中で半分は縦のつながりであり、もう半分は横のつながりであると山口先生がおっしゃっておられたように、この合宿で出会った同年代の友人、諸先輩方との出会いに感謝し、これからさらに仲を深めていきたい。

日本人の古代からの富士山に対する信仰を思ひて

富士の山雲に隠れて見えざれど先人の願ひその意味の見ゆ

御講話の先生らの熱意と短歌創作の体験を通して

（九州産業大学　経　三年　八巻憲郎）

今回私がこの全国学生青年合宿教室に参加して一番強く印象に残ったことは、人の探求心や好奇心を養うには年齢や時期というのは関係ないということです。御講話で教壇に立たれた先生たちの熱意というものを感じ、普段の日常では考えたりすることがあまりない日本という国やそのあり方をこの三泊四日の合宿で多く考え、共感しました。それも熱意をもってお話して下さった先生方のおかげです。

また、個人的に合宿で特に面白かったのは短歌創作の時間でした。小学生の時に作って以来、短歌にふれ合う機会もなかったので不安ではありましたが、短歌導入講義でしっかりと、作る際のアドバイスをいただいたので、自分の中で不安はなくなり、よい短歌を作ることができたと思いました。

その後の班別研修では班員の皆に自分の短歌を批評してもらい、さらによりよい短歌ができました。三泊四日の合宿で共に過ごした班友に感謝します。

全国学生青年合宿教室での先生方の熱意に打たれて

班友と合宿で学びし体験を我が人生に生かしてゆかむ

短歌創作を、今後の人生に生かしていきたいと思う

（甲南大学　経　三年　富山晴希）

私が今回の合宿で一番印象に残っていることは、短歌創作と、その後に行った相互批評です。そもそも私自身、短歌創作というものに取り組んだのは中学校の授業の一環として行って以来のことで、創った歌を批評されるということは初めてのことだったので、とても新鮮でした。批評をしてもらうことによって、自分だけでは思いつかなかった表現や、私の気持ちにより近い表現を見つけてもらったり、班員の人が私の気持ちになろうとしてくれたことが何より嬉しかったです。

今後も短歌を創作する機会があれば、積極的に取り組んでみようと思いました。

また、合宿全体の講義を受けて、今までに全く知らなかったことや、ある程度は知っていたけれども詳しくは知らなかった、普段大学に通っていても学べない多くのことを学ぶことができ、大変貴重な経験をさせて頂いたということを実感し、この合宿で学んだことを今回だけで終わらせず、今後の人生に生かしていきたいと思います。

全国学生青年合宿教室が終了し、班友と別れる際に
全国の合宿の地にてできたりし友との別れを寂しく思ふ

カメラ・レポート・7

野外研修。短歌創作を兼ねた野外研修は、「秩父宮記念公園」で行はれた。園内には茅葺のご別邸が残されてゐて、宮様が大東亜戦争終結の玉音放送をお聴きになったといふお部屋なども公開されてゐた。

人生の中で一番有意義な時間を過ごす

（福岡大学　経　一年　河村拓輝）

私は今回初めて全国学生青年合宿教室に参加した。合宿での講義はどれもとても内容が濃ゆく、初めて知ることばかりだった。講義では歴史の勉強だけでなく、古典に対する取り組み方や、短歌のつくり方、生き方など、学ぶことができとても面白かった。

班別研修では自分以外の人の様々な意見や考えを聞くことができた。私たちの班は合宿初日は互いに緊張していたのか、あまり話すことがなく静かだったが、班別研修などで意見を交わしていくうちに仲が深まり、合宿三日目になると笑いが止まらない班となっていてとても楽しかった。

合宿では慰霊祭のような貴重な体験や規則正しい生活スタイル、志の高い班友に囲まれて、この合宿でしか感じることのできない雰囲気を味わうことができ、大学生活で緩んでいた気持ちが締め直された気がした。この三泊四日は今までの人生の中で、一番有意義な時間を過ごせたと思う。

富士山の麓での三泊四日の合宿最終日を迎えて

富士山の頂き見たいと思へども合宿は終はりて見ざるは悲しき

充実と感動溢れる合宿教室

（元福岡県立直方高校教諭　小野吉宣　68歳）

感謝に始まり、充実と感動溢れる合宿教室でした。運営・指揮の方々に深謝します。

小柳志乃夫兄のご講義の折に

ゑみ浮かべ「昨夜は眠れましたか」と学生達に問ひかけられり

よき講義続きし後の大任をいかに果たすか夜更し給ふや

国民が寝しずまる頃大君は雪道踏み分け祭旦祭へ

今の世は暴君桀の楽しみを国民あまた楽しみふける

歴代の天皇方は国民の楽しむ様を楽しみ給ふ

敗戦を「平和が来た」と喜べど深き悲しみ在るを忘れじ

今林賢郁学兄の「合宿を顧みて」の折に

あたたかきまなざしそそぎ「三日前開会せしを顧み給へ」と

日常とさはに異なるスケジュール乗り越えて来ぬ友らと共に

「何を失ひ」「何をとりもどすか」班別の討論重ね求め合ひけり

人生を「よりよく生きる」問ひかけを日々刻々に我に課さなむ

成長し進化し続くる神々は唯一神のゴッドにあらじ

失敗し嘆き悲しみ泣き枯らす八百万の神々は我等に生きる

むづかしく近より難き古への記紀万葉は近づきて来ぬ

第十一班―女子学生―

班長を仰せつかり

（元山口県立熊毛南高校教諭　寶邉矢太郎　62歳）

一、広い敷地、少人数のスタッフに拘らず獅子奮迅の動きの指揮班、誠に御苦労様でありました。

一、一年の用意周到の準備をなされた運営委員の御尽力、誠に有難うございました。

一、國武忠彦先生と小柳志乃夫先生のあとの班別研修、盛り上がりました。涙にくれた忘れ難いものとなりました。御二人の尋常ならざる感化力には恐れ入りました。

一、班長を仰せつかり仰天しました。情けないことに体力がもつかと危ぶまれましたが、七名の乙女の暖かい心と驚くべき感受性は小生の気力上昇に点火してくれました。よくメモをとり講義の把握に努めようとする態度は立派でした。

〝合宿を顧みて〟にて

それぞれの講義の核をおさへつつ話されればよみがへる日々

日の本のいのちにめざむるいとなみをつづけられよと訴ふる熱くに

気付…講師登壇のとき、講師が立ち上がられたと同時に〝起立〟の号令をかけるべき。起立した中に講師を迎へるべきでせう。慰霊祭の直会は正解でした。大岡弘さんの執念に感謝致します。

カメラ・レポート・8

古典講義。昭和音楽大学名誉教授 國武忠彦先生は、〝あはれ〟とは〝ああ〟といふ感動の言葉である。感ずるとは〝ああ〟とゆれ動く人の心の発見である。小林秀雄は〝知る事と感じる事が同じであるやうな全的認識〟を説いた、と述べられた。

古典の世界が見えた喜び

（明星大学　教　四年　江崎真穂）

心に残っているのは、國武忠彦先生のご講義の中で紹介された小林秀雄の「魅力ある人間の姿を読むには（中略）見ようともしないで見る眼、おおらかに見る眼、驚くほどの率直さ、正直で素朴な心の眼を失ってはならない。」という言葉です。そしてこの言葉の意味を私は、班別研修でより感じることが出来ました。微生高が酢を借りに行ったのを難じる孔子に対し、なぜ宣長が意見したのだろうと考えた時、宣長は微生高に対してもおおらかな眼で接していて、その中で彼の誠実さに気付いたのではないだろうかと思いました。私の中で深い感動と古典の世界が見えたよろこびがわいてきました。このような学問のよろこびを味わうことが出来て本当に良かったです。

慰霊祭の祓詞（和歌朗詠）をききて

ますらをの悲しきいのちをこれほどにつよく思ひ入る呼びごゑしらじ

御祖先の意志

（九州工業大学　工　三年　髙野真里）

私は今回の合宿で若い世代こそ今知るべきことが多くあることに気付きました。歴代天皇のように国民のことを考えられるほどの出来た人間になれるかは分かりませんが、せめて自分の御祖先の意志を子孫に伝えていけるよう最低限のことはできるように、今の時間を無駄にしないようにしたいと思いました。また、単科大学に通っているとどうしても考え方や思考が似ている人が多いので、合宿に参加し様々な大学の学生や社会人と関わることができて、いろんな意見を聞けて良かったなと思いました。

日本は大好きな国ですが、誇りに思える国という気持ちになれるように多くのことを学び、祖先の方々の気持ちに答えられるように頑張りたいと思いました。

我が祖先伝へたきことあるけれど聞く耳もたぬわれ恥ずかしき

最後の世代

（中村学園大学　流通科学　二年　梅﨑理恵）

この合宿でいろんな先生の講義を聴き、今までは本当に無知だったと思いました。三種の神器は、私の今までの認識では神話で出てくる物、天皇の側にあるものというだけでした。しかし講義を聴いて、三種の神器がどういう意味をもって今存在しているのかを考えると、先生がおっしゃった神話に生きる民族という言葉がより深く感じられました。

また、祖先の話が出てきた時に、小学校の時に言われた「あなたたちは戦争を経験した人たちから直接体験談を聞ける最後の世代」という言葉をふと思い出しました。祖父母が参加していただろう戦争も、ずっと遠い昔の様に思っていた私は、改めて、せめて自分の家系の祖先のことはしらなければと思いました。

はるばると静岡の地に足はこび祖先のことを改め考ふ

古典講義。古典の楽しさに引き込まれ顔をほころばす参加者。

日本人として

（ニューヨーク大学アブダビ校　教養　二年　鈴木茉莉菜）

私は見た目が東洋人で、日本で長い間暮らしてきたので、ある意味日本の代表として見られます。なので、アブダビでの大学生活を送っていると、私に対して「日本は戦時中こんなひどいクレイジーな国だった」等を言って来る人が沢山いました。その際、私も黙っていられず反論を出来る限りしましたが、自分の知識不足が原因で相手を論破する事ができませんでした。とてもなさけなく、悔しい思いをしました。

今回の合宿で、日本人が古代から守り続けて来た文化や価値観、また日本という国の国民として生まれて来た事のありがたさを改めて知る事ができ、とても幸せに思います。日本人としての軸を築くという事と、素直なまごころを持って正しい知識を自分から求め続けることが課題だと感じました。

我が国の国民としてやるべきは自国のことを学ぶことかな

こんな学びの場は、どこをさがしてもないのでは

（高知市立青柳中学校教諭　岡　つぐみ　43歳）

自分はどうしてこんな大変な仕事をしているのかと思うことがあります。しかし学生時代にこの合宿で学んだ事は、今の自分の気力を維持し続ける大きな糧になっています。素直なまっすぐな心を持つことの大切さや、明るく清らかな日本人の命の流れを和歌や歴史を学ぶことによって実感し、自分のルーツに自信と誇りを感じることができるこの合宿に出会えて、本当に幸せです。

過去を裁くのではなく経験すること、それは歌を読むことや歴史をより深く学んでいくことによって獲得できるもので、非常な努力を要するものであると、今回の講義の中で改めて実感しました。そして先人の言葉に共感していく世界を実感できるのは、この合宿ならではであり、運営や講義など多くの方々の願いや祈りがこもったものであるからだと思います。歴代の天皇の御製にこめられた御心を、その歌の背景を丁寧に解説していただきながら、読み味わってゆくとき、講義をしてくださる先生の言葉やその姿を通して、私たちに伝わり、共有することができます。こんな学びの場は、どこを探してもないのではないかと思います。本当にありがとうございました。

何一つ定かなものはあらねどもみうたをよみてこころ和らぐ

素朴なる言葉のうちにおほらかに歌を読みつぐ国にうまれし

おじいちゃんの戦争

（㈱ファミリーマート　平井仁子　31歳）

私は「天皇陛下の大御心を誤りなく理解するために修錬するのが和歌」という話に感動しました。朝の合唱でも「虫のこえ」の唱歌と明治天皇の御製「さまざまの虫のこゑにもし

られけりいきとしいける物のおもひは」を結びつけて解説して下さり、私もそのような感性を持ちたいと思いました。

慰霊祭では、「ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」の和歌朗詠に感動し、この和歌は父が最も好きな和歌だと思い出しました。そして、慰霊祭後の班別研修にて、祖父が大東亜戦争で戦ったことを思い出しました。普段、戦争のことを聴いたり語ったりする機会はあるのですが、「おじいちゃんが戦った戦争」という意識が薄れていました。本当に大切な学びをありがとうございました。

ますらをの強き心を引き継ぎて引き継ぎまもる大和島根を

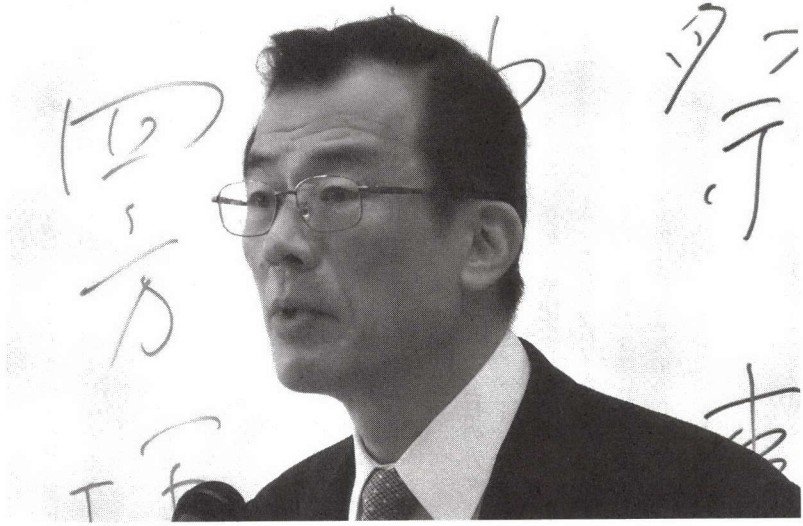
気付…「よろしくお願いします」「ありがとうございました」の言葉とお辞儀が一緒になってしまっています。礼儀作法として、先言後礼を徹底した方が美しく、心も整うと思います。

第二十一班―男子社会人―

慰霊祭（御魂と心を通はせ合ふこと）

（ハローワーク福岡南　古川広治　48歳）

慰霊祭は先人（ご先祖様）の御魂をお迎へし、そのお気持ちをお偲びし、願ひを受けつぐ。御魂と心を通はせ合ふのが慰霊祭であるとの説明があつた。この言葉を心に留めて慰霊祭に臨んだ。新たな、そして素直な気持ちで参列できたやう



「御製に仰ぐ天皇のお心と日本の国柄」と題して、興銀リース㈱ 小柳志乃夫先生は、歴代天皇のお歌に拝される世界は、神に向って祈られるまごころと照応するものであることを示された。

に思ふ。

久しぶりに班員（班長）として参加することができ、充実した日々を送ることができました。運営スタッフの皆様のご配慮に感謝します。ありがたうございました。

慰霊祭

みおやらのみたまとこころをかよはすとふみことばむねにみまつりにのぞむ

思ひ返し学んで行きたい

（上天草総合病院　福田　誠　59歳）

多くの熱の籠つた御講義と指揮班を始めとする大変なご苦労の事務方々に支へられた合宿に参加できありがたうございました。多くの御講義にまだ消化不良のところもありますが、自分なりに思ひ返し学んで行きたいと思つてゐます。

六十年継続した全国規模の合宿ですが、学生参加の減少により今後の運営が厳しいと思ひます。しかし、全体感想発表を聞いて、規模を縮小してでも何らかの形で継続すべきと感じました。自分の勉強とともに何らかの形で参加したいと思つてをります。

雨霧のたちこめ見えぬ富士山に向ひて唱歌皆と歌ひぬ

「虫のこゑ」「紅葉」の唱歌歌ひゆけばたけゆく秋の姿浮びく

短歌相互批評で思いを共有できた

（日本ベーリンガー・インゲルハイム㈱　出村信隆　58歳）

二回目の合宿でしたが、昨年以上に得たものがあったように思います。

例えば、短歌相互批評ではご本人のお考えや感覚を読み取ることに努め、その結果多少なりともその時のその方の思いを共有できたように思います。

美智子様の御歌

「生きているといいねママお元気ですか」文（ふみ）に項傾（うなかぶ）し幼な児眠る

その時の情景や美智子様の深い慈悲に何とも言えない気持ちになりました。

講師の先生方、運営に当たられた会員の方々、班員の方々にはとりわけお世話になりました。今回もさらに学びのよき機会となりました。皆様に感謝申し上げます。

一年前淡路で会ひし人々と喜び交はす富士を背にして

来年も喜びをまたともにする新たな縁に感謝を捧ぐ

慎みと優しさ溢るる合宿に見しは大和の心なりけり

美智子妃の清き慈愛に心震へただ幼児の幸祈るのみ

汲めどもつきない日本文化の源泉

（㈱日本教文社　坂本芳明　50歳）

今回は、東京に住んでいた時期に共に学んだ元学生たちと再会することができ、旧交を温めることができました。

長谷川三千子先生の古事記のご講義は、まさに血の通った生き生きとしたお話で、改めて日本の神話の素晴らしさを実感しました。國武忠彦先生の『本居宣長』のご講義も小林秀雄の着眼点の本質をわかりやすくお話しくださり、啓発されるところの多いお話でした。

汲めどもつきない日本の文化の源泉に触れた貴重な合宿であったと思います。

天皇陛下の御製を読んで

（中村学園大学　内場真一　35歳）

山口秀範先生のご講義では「教育勅語」の内容を改めて知り、教育機関で働く者として、知らないことが多かったと気づかされました。熱く語れる先生のお話に感動いたしました。

長谷川三千子先生の三種の神器のご講義では、曇りのない心を映し出す鏡の意味を知ると共に、勾玉や剣についてももっと知りたいと興味を持った次第です。

短歌は上手く創作することができませんでしたが、相互批評の中で、皆さんに私の気持ちを知っていただき、私の短歌を本当に熱心に考えてくださったことを感謝しております。初参加の私に丁寧にご指導くださいました。

また、天皇陛下の御製を読んで、こんなにも国民の事を考

学生発表。日本大学法学部三年名和長高君は、「古典講義」をされた國武忠彦先生の東京での読書会での昨年からの体験として、歴史とは、残された言葉を通して出来事を経験した人間の精神や思想を自らの心に思ひ出すことであると学んでゐると語った。

えていただいているということを知ることができたことが、一番の経験でした。

講師の先生方、運営に携わられた皆様、本当にありがとうございました。

古典読み先人たちの言葉から思ひを知りて生き方学ぶ

よりよく生きる

（全日本学生文化会議　清川信彦　25歳）

山口秀範先生のご講義を受けて毎日の仕事に流されている自分がいたこと、生きている実感やみずみずしい感動もなく、ただただ与えられた仕事をこなすだけの日々を過ごしていたことに気付きました。まさに、「よりよく生きる」ということを全く考えない日々を送っていました。そのような中で、次の明治天皇御製を拝し（小柳志乃夫先生のご講義）、大きな感動がありました。

をりにふれて（明治四十五年）

國民の業にいそしむ世の中を見るにまされるたのしみはなし

この御製を拝し、私自身が自分の仕事にやりがいや使命感を持ち、いきいきと働くことこそが、天皇陛下が一番お喜びになることであり、望まれていることなのだと感じました。吉田松陰先生の『講孟余話』に記されていた「君民上下互に其の楽しみを楽しむ」とはまさにこのことだと思いました。これまで「君民一体の国柄」と言われてもどこか実感がわかなかったのですが、この御製を拝して実感することができました。

改めてこれから私は御製を仰ぎ自らの生き方を律しながら、使命感をもっていきいきと仕事をしていきたいと思いました。

班別研修

父ほどに年の離れし先輩と共に過ぐせば顔のこはばる

相共に心開きて語らへばしだいに笑みもあふれくるかな

合宿教室が続いて良かつた

（埼玉県庁企業立地課　飯島隆史　62歳）

毎回思ふことであるが最終日の全体感想自由発表の時は合宿教室が続いて良かつたといふ思ひである。参加人数は年々減少し、私自身も毎年の参加はしなくなつてしまつたことや多々反省のことばかりが頭を悩ますが、この最終日の感想自由発表を聞くとつくづく合宿教室が続いて良かつたといふ思ひに浸るのである。

私も六十二歳となり、第二の人生に入りそれなりの思ひがあるが、改めてこの国文研の活動に誠に微力であるが参加させて頂ければと思ふ次第である。

人かはり逝く人もまたいやますも合宿教室さらにと願ひをりたり

第二十二班―男子社会人―

〝偕に楽しむ〟国柄を身の回りに顕していきたい

（日本青年協議会　外村聖典　40歳）

今回は初めて社会人班の班長をさせて頂き、大変貴重な体験となりました。班員は、60代70代の大先輩であり、班長として至らない点も多くありましたが、班別研修では熱の入った議論となり、お互いの考えを吐露する中で、班の一体感も深まったと感じています。私にとっては、大先輩の学生時代の話や大学紛争の貴重な話も聞けて、大変有意義でありました。

講義においては、小柳志乃夫先生の〝偕に楽しむ〟についての吉田松陰先生の『講孟余話』の話が心に残っています。日本の国柄とは、君が民の楽しみを楽しみ、民が君の楽しみを憶念する。現実世界に君民一体の姿を現し出し、〝偕に楽しむ〟と表現されている事に感動しました。

周りの家族や先輩・後輩と共に、このような偕に楽しむ世界を現実に顕す為にも、和歌の修練に励みたいと思います。

君臣も偕に楽しみを楽しむとの国柄を今に顕しゆかむ

会員発表。㈱ロゼッタ　高木雅史氏は、学生時代初めて参加した合宿の短歌の相互批評の折、氏の歌に対して班の先輩が、気持ちに寄り添ひ真剣に付き合って下さったと話し、この合宿で心底から付き合へる友を見つけて下さいと呼び掛けた。

「中立」とは日本の伝統・文化の上に立つこと

（森重忠正　71歳）

三泊四日の合宿教室が終わった。七名の社会人班、大部分が初めて顔を合す方々だった。教師の世界で左翼と戦ってきた人。三島由紀夫事件で一念発起し自衛隊に入った人もいた。今の自衛隊の中では天皇につながることは一切口にしないし、教えないという現実を知り驚かされた。自衛隊は政治的に「中立」を守ることになっているそうだ。「中立」と言えば一見聞こえは良いが日本の国柄を知り日本人として誇りを持つための文化・伝統を学ぶことは基本的なベースとして自衛隊員にも必要なことではなかろうか。「中立」はそのベースの上に立った後のことだろう。天皇とか国のためにと言えばすぐ右翼という風潮がまだ続いていることが嘆かわしい。

外は雨ときをりひびく砲音を聞きつ合宿今終らんとす
次々に立ちて己れの決意をば語る友らに胸をうたれぬ

富士山の下での幸運を感じた

（チャンネルAJER　佐藤和夫　68歳）

今回、山内健生先生のご紹介で初めて参加させて頂きました。教育勅語や記紀・御製については浅い知識しか持ち合わせていませんでしたので、先生方の熱さ溢れるご講義で、その深い意味を教えて頂き感謝に耐えません。学生の頃にこうした教育を受けていればと思いましたが、六十八歳になって知り得た幸運も感じています。

二十二班の七名との班別討論も得るところが多く、四日間が私の人生にとってかけがえのない思い出となりました。和歌の創作も初めてで若き頃富士の演習場で訓練したことを和歌にしました。過去の思い出と今回の合宿の思い出が共に富士山の下の出来事で何か深い縁のようなものを感じます。諸先生、合宿を支援していただいたスタッフの皆様に貴重な機会を頂きましたこと心から御礼申し上げます。

合宿の熱き思ひの語らひに生きるは何か考へさせらる

「友よ思はずや」の言葉にどう応えるか

（小林　至　65歳）

夏季合宿も六十回の節目として最後とお聞きしました。大先輩方が、戦後の思想混乱の中、日本文化伝統・万世一系の天皇をいただく皇国日本を若き学生へ継承すべく回を重ねてきた。来年はどういう形であれ、夏合宿の開催は継承すべきである。それは、国文研の大きな使命だと考える。

今回の合宿では小柳志乃夫兄の講義で御製と共に戦没学徒加藤信克氏遺詠「すなほなる幼心を一すぢに守りて生きむと友よ思はずや」友よ思はずやの言葉に涙がとめどなく流れてきた。「友よ思はずや」の言葉にどう応えるかが自分自身への問いである。

今後、短歌をつくる、ものの感動を短歌につづる修練をしたい。この事が今後の自分自身の課題である。

旧秩父宮別邸の庭にて

残念にも霧雨ふりて富士の山雨雲におおはれ姿の見えず
時々に霧雨やみて雲間より富士のすそ野の姿見せけり
陽の差して雲の流れの速くして富士の高嶺の姿みせけり
見ることをあきらめかけて富士の山仰ぐことできただにうれしき

和歌を作る気力を持てるきつかけがつかめた

（農業　猪部敬彦　63歳）

こんな年齢になって、山口秀範社長のお誘ひで初めて参加しましたが、やはり有益でした。小さな事では、同班の佐藤さんと知り合へ、ペリリュー神社のニミッツ提督の言葉を記した石碑（玉砕した日本軍人の愛国心・勇気を讃へたもの）の存在を確認できたこと、大事なことでは、和歌を作る気力を持てるきつかけがつかめ、これからの学び・生き方に生かせさうなこと、もつと学びたいと思へるやうになつたことです。

今回は、私と同じ大分県在住の方が居られませんでしたが、これからの学びを進める中で、大分にもこのやうな同志を増やしたいと、強く思ひました。

これからも山口社長の熱い心に学び、後悔のない人生を全うしたいと思ひます。

お世話下さつた事務局の方々、諸先生方、本当に有難うご

創作短歌全体批評。熊本市役所 折田豊生先生は、相互批評の要点は作者の思ひをよく聴くことであり、互ひに知恵を出し合って作者の気持ちに添ふ表現に近付けてゆき、心が一つに溶け合ふ素晴らしい交流の時間となることを願ってゐる、と励まされた。

ざいました。お疲れ様でした。

初めて慰霊祭に参列して
ますらをの悲しきいのちと修祓(うた)響き胸に迫りて涙は止まらず

おおらかに堂々と生きる生き方を感じた

（末次直人　62歳）

定年退職後、二回目の参加であったが深く多くのことを勉強させていただきました。

① 長谷川三千子先生の古事記の講義について

・成長する神々・日本の国柄を表わす天と地をつなぐ三種の神器・人の心に残る原始的な荒々しさの強さなど古事記にこもる豊かなもののヒントをいただきました。読み続けて行きたいと思います。

② 小柳志乃夫先生の講義

・皇室の「祈り」「民を大事にされるお姿」は、断片的には知っていたこともありましたが、今回の講義では歴代を追ってきちんと整えられたお話しをお聞きすることができ、はっきりと皇室のお姿に尊さと力強いものを感じることができた。

③ 合宿では社会人班に入り、多くの経験を積まれた諸先輩のお話を聞くことができ年配になってもおおらかに、堂々と生きる生き方を感じ取ることができた。

朝の集ひの文部省唱歌を導く同輩あり
「冬の夜」を初めて歌ふ参加者に調べ伝へんと工夫されたり
この歌を聞きしる先輩らが一番を歌ひて後に重ねゆきたり

それぞれの講義に一貫したものがある

（元小田原市立矢作小学校校長　岩越豊雄　71歳）

毎年不思議に思ふことは、特に事前の打ち合はせをした訳ではないのに、それぞれの講義に一貫したものがあるといふことである。山口秀範氏の「教育勅語を思ひ出さう」では、皇太子裕仁親王殿下が受講された杉浦重剛の倫理ご進講の大体の方針の一つは三種の神器と天壌無窮の神勅の話であった。二日目の長谷川三千子先生の「三種の神器の謎を解こう」で、まさにそれがより詳しく深られた。そこに共通してあるのは、民族が受け継いできた記憶といふことであった。それを読み解くためには、国武忠彦先生の宣長の話、正直で素直の眼を失ってはならないことであり、その修練は小柳志乃夫氏が最後のまとめに引用された明治天皇の御製「すなほなるやまとごころをのべよとて神やひらきし言の葉の道」である。神のひらきし言の葉の道は、たぶん日本のはじめの歌といはれる、素戔嗚尊の歌「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるその八重垣を」のことから始まるのであらう。

素直なるおさな心の尊さをあらためて学ぶこの合宿で
鈴木茉莉菜さんの学生代表挨拶を聞いて
素直なる心の大切さ学びしと結びしあいさつに心うたるる

第二十三班―男子社会人―

神話の世界をもう一度勉強してみたい

（㈱寺子屋モデル　西山八郎　62歳）

社会人班は、忙しい仕事の合間をぬって来られていることを思うと、一日一日が貴重な時間に思われました。

印象に残っている御講義は、長谷川三千子先生の神話についてのものでした。知っているようでほとんど知らなかった神話の世界をもう一度勉強してみたいと思います。

慰霊祭を終へて

祭り終へ暗がりのなかみ友らと語り合ひつつ班室に向かふ
ほのぐらき外灯は夜霧につつまれて草むらゆ遠く虫の声する
秋雨につめたくぬれて草むらになく虫の音は小さくなりて

日本は日本の価値を育む必要がある

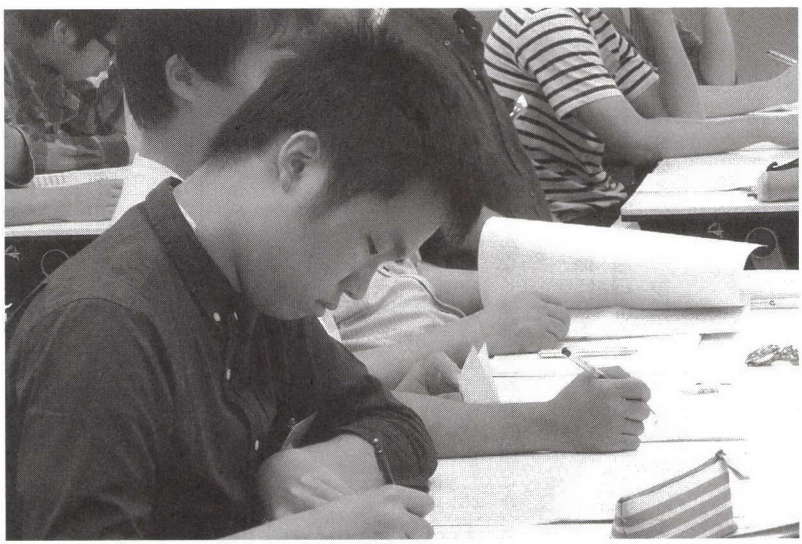
（日本大学名誉教授　夜久竹夫　67歳）

昨年に引き続いて合宿に参加した。

今年は、秩父宮記念公園の防空壕見学があり、感慨深かった。

以下で、班別研修で発言した事を感想文にまとめる。

最近筆者の周囲ではグローバル化や多様化を理由に、日本の文化を抑えて外国の文化や人を入れる動きが目立つ。



講義を熱心にメモを取る学生。

しかしながら、国内の多様化は世界の均質化を進めて、世界全体の多様化には逆行する。世界の多様化の中に日本の価値を入れるのならば、日本の価値が存続していなければならない。そのためには、日本が日本の価値を育んでいる必要がある。日本が多様化したら、その分日本の価値を担う人は減るから、世界に日本の価値を入れることは難しくなる。

欧米の価値を贔屓するグローバル化論者はともかく、世界の多様化を求める人達には日本国内の多様化は世界の多様化に逆行することを指摘したい。

秩父宮記念公園の防空壕を訪ねて

備へ無き国に残りし防空壕の備への重さ今に伝へる

軌道修正の場

（㈱ライフプラザパートナーズ　河崎由紀夫　54歳）

この合宿は日頃の勉強や自己のあり方、国家のあり方に関し軌道修正していただけるものであります。今回新たに確認ないし再確認したものを列挙いたします。

三種の神器の意義。記紀・十七条憲法・五箇条の御誓文・教育勅語の趣旨。沈潜反復、優游饜飫、之ヲ口ニシテ絶タズ、之ヲ手ニシテ釈カズ。君民上下互ニ其ノ楽シミヲ楽シム。すなほなるやまとごころをのべよとて神やひらきし言の葉の道。

これからも大和心すなわち誠の道と心得て、日々精進研鑽を怠らず、自らが血肉としたものを周りへ拡げ、次代へ伝えてまいります。一媒体となる覚悟であります。

うすびさしかすかに見えくる富士山に友どちの声よろこびに満つ

充実した時間を過ごすことができた

（㈱ビジネス社　佐藤春生　38歳）

まず「一同礼！」という号令を聴いたのはもう二十年以上前ではないだろうか。十一時消灯の六時起床、しかも酒なしという規則もそう。まずそれが新鮮だった。輪読というのも懐かしい。小中学校を思い出すようないまとなっては得難い体験をできたことが何よりだった。

個人的にもメインイベントだった長谷川三千子先生の講演は日本神話である記紀の謎をとくという刺激的なもので、高森明勅氏の見解に依拠しながらも、先生らしい丁寧な論理展開と鋭い感性がいかんなく発揮された講演となり、時間が足りないのが残念だった。

班長をはじめ班の皆様にもよくしていただき、輪読や討論、食事と充実した時間を過ごすことができた。

事務局の皆様と合宿の参加者に感謝申し上げます。

「感動」の連続だった

（武澤陽介　35歳）

今回で合宿教室は三度目となる。今までの二回とも新鮮で

異なった体験をしてきたが、今回の合宿を終えた今感じている感激は言葉では言い尽くせないようにさえ思う。それ程、今年の合宿は「感動」の連続だった。

どの御講義も熱意と愛情に満ちており多くの気付きや発見を新たにすることが出来たが、私は特に、小柳志乃夫先生の、御製に関する御講義に感銘を受けた。先生は御製を拝しながら、涙しておられた。その姿は真の感動からのものであると伝わってくるものだった。今でも、感想文を書きながら、その姿を思い出すと涙が出てくる。共感の力はまことに凄いものだった。

私は教壇に立つ時、またはステージ等で人前で音楽を奏でる時、小柳先生をはじめとする諸先生方の姿を思い出し、真の感動を伝えていきたいと思う。

御製を仰ぎて

ありがたき大和心の言の葉のまことの調べに涙あふるる

言葉の強さに圧倒された

㈱テレビ西日本　穴井宏明　33歳）

合宿参加は学生時代以来十年ぶりとなります。

御殿場で合宿したこともあり、当時のことを思ひ出さずにはゐられませんでした。

現在、学生時代に合宿で共に学んだ友達は全国各地で働いてゐますが、その友達がお互い仕事の合間を縫って合宿地に

講話。元皇宮警察本部長 小田村初男先生は、ＮＨＫで放映中の大河ドラマ『花燃ゆ』に登場する小田村伊之助について、至誠の人といはれる生き方を紹介された。

集まるといふことは本当に嬉しいことだとつくづく感じました。お互いが大切にしてゐるものを改めて確認できる、そんな喜びもあるやうに感じました。

合宿の御講義では山口秀範先生の導入講義が最も心に残りました。中でも、教育勅語の「朋友相信ジ」を説明される山口先生の言葉の強さ、迫力に圧倒されました。山口先生の魂が直接私の心に響いてくる、そんな印象を受けました。

山口秀範先生の御講義をお聴きして

「私には信じ合ひたる友有り」と語る言葉に圧倒されけり

家訓のご講義が心に残った

（中外鉱業㈱　濱崎史嘉　33歳）

教育勅語と家訓という山口秀範先生のご講義は分かりやすく心に残るものでした。教育勅語は歴史の勉強で接することはあるが、教科書で見る程度でその内容をしっかり考えることはないと思います。私の家で家訓といえるようなものはありませんが、もし家訓がご家庭にあるような人は、王さんの家訓が例で出ましたが、その内容を自分自身でしっかり守っていくように思えます。それを日本国民として、日本という家の家訓として守っていくものであるとのご講義は、なるほどなと思いました。私には家訓を定めるということは、すごく立派なことのように思えるのでできませんが、人として、日本国民として、正しいことは守らなければいけないなと思いました。

数年ぶりに富士を訪れて

雨の中富士の裾野に皆集ふ思ひ出語らひ懐かしく思ふ

素晴らしい方々に巡り会えた

（㈱まるぶん　高山広宣　31歳）

私は、この度初めて国民文化研究会の合宿に参加しました。㈱まるぶん社長よりご指名を頂き、参加させて頂いたことに心から感謝したいと思いました。

全くと言っていいくらい日本国に対しての知識はなく、私でいいのであろうかと思いましたが、ありがたいお言葉を頂いた、これも何かのご縁だと思い、たくさんの事を学び習得しようと、強い気持ちで望みました。

その結果、予想以上に素晴らしい講師陣や合宿の内容、参加者の方々に巡り会い、学び、新たな発見をしました。それも、私だけではなく、参加者全員が熱心に取り組まれていたからだと感じました。

我が国の歴史学びし班員と国文研で再び出会はん

明日からがんばりたい

（熊本県立熊本高校教諭　久保田　真　49歳）

講義室の横断幕を見ては、何度か六十回かと考へてをりま

した。班に入り、初めて参加してくれた三十代前半の班員が終始学びたいといふ姿勢にあふれてをり、やっぱりやらないといけないと思ひました。同じく班員の夜久竹夫先生のお話を聞いて、グローバル化、価値の多様化に今、国文研は、といふか私達保守派は負けてゐると思ひました。また、対抗できるとの話を聞き、心強く思ひました。明日からがんばりたいと思ひます。

伊藤俊介運営委員長、内海勝彦指揮班長はじめ運営スタッフの皆様、ありがたうございました。力を与へていただいた合宿でした。

小柳志乃夫先生の御講義を聞きて

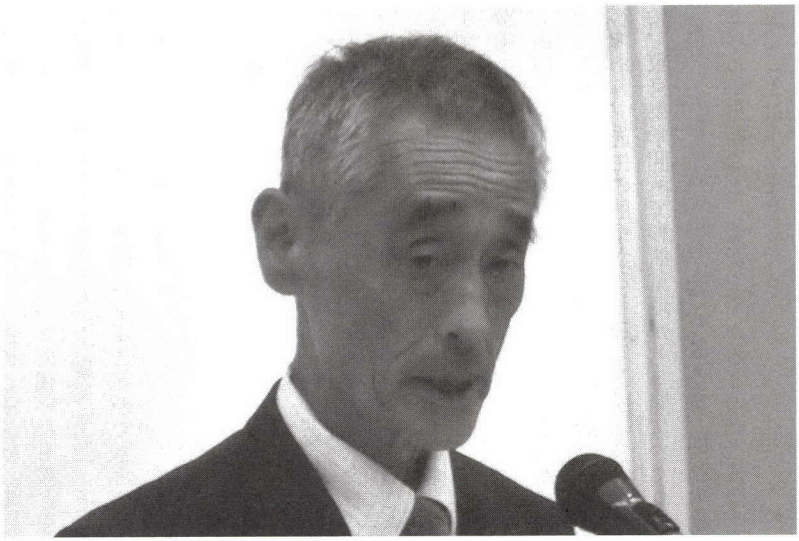
いにしへの天皇の国民を思はるる御言葉示し語らる
近年の天皇の御言葉を同じと語られつながり示さる
親思ふ恋の御製（うた）などテーマごと示され親しく御製を味はふ
君民が共に楽しむ偕楽の我が日の本に似たりとのたまふ

第二十四班―男子社会人―

学びの道を教はった合宿教室

（SIS㈱　内田厳彦　69歳）

非常に中身の濃い忘れられない合宿となりました。合宿の時に配られた資料・自分のメモを読み返す時、講師の方々の



慰霊祭斎行に先立ち、元山口県立高校教諭の寳邉矢太郎先生から、慰霊祭斎行の趣旨と祭儀の手順が説明された。

御表情・口調が思ひ出され、声まで聞こえて来る気がします。それは、講師の方々が真に適切な内容の資料・御製・勅語等を周到に準備され、思ひのたけを我々に語りかけて下さったからと思ひます。

この合宿では古代日本から近代日本にまで連なる縦の糸のやうなものが一貫したテーマであったと思ひます。

それは講師の方々のお力で気付かせて頂いたものですが、「最終的には自身で感じ取るしかない」と、さう思ひました。

また、期間中私が属する班では『本居宣長』を三十年も読んでゐる方を筆頭に、日頃からよく勉強してゐる方が何人もをられ、自身の勉強不足を痛感しました。

國武忠彦先生の御講義で、古典について説かれた箇所で小林秀雄先生の文章を引用され「鑑賞のない處に古典の古典たる意味はない」との言葉が、強く印象に残りました。

「自分一人でも古典の勉強をやってみよう」さういふ思ひにさせられた合宿でした。

配られし先生方の御講義の資料何より有難きかな
日の本の遠つ御祖先ゆ近きまで遍く記すこれら資料は

原点に立ちかへるべき合宿のあり方を示していただいた

（日章工業㈱　藤新成信　55歳）

第六十回の合宿開催にあたり、伊藤俊介運営委員長以下の事務局の皆様に改めて感謝申し上げます。

転換期の中で今後の合宿のあり方を考へるに当り、今回山口秀範さん、長谷川三千子先生のご講義は、実に原点に立ちかへるべき合宿のあり方を示して頂いたものと思ひます。「記紀万葉」「明治天皇と聖徳太子の讃仰研究」、そして「皇室と国民」のテーマを一体的に学ぶことができるのは国文研合宿しかないものと思ひます。

日暮れて道なほ遠し

（元地方公務員　井原　稔　69歳）

今年の合宿研修も一日一日が大変充実した日程であり、深い感動と共に、稔り豊かな心の糧を頂戴することが出来ました。平成二十三年の江田島合宿以来五年連続の参加となりますが、志の高い師や友らと出会へてつくづく富士山の麓・御殿場の地にやって来てよかったと思ってをります。

山口秀範先生の御講義「よりよく生きるために―『教育勅語』を思ひ出さう―」は、まさしく合宿導入にふさはしい内容であり、先生の熱情がひしひしと伝はって参りました。特に、東宮御学問所で杉浦重剛が七年間にわたり心血を注いで「倫理」の御進講を申し上げたことが、昭和天皇の敗戦時における御聖断などに繋がってゐるとの御指摘は感銘なくして聞くことは出来ませんでした。

長谷川三千子先生の御講義は、拓殖大学のオープンカレッジでの受講を含めると今回で三回目となります。いつもなが

らたをやかな語り口で、しかも凛としたお姿にうっとりとしつつ拝聴させて頂きました。三種の神器は天と地とを統合する象徴であること、「これの鏡は、專ら我が御魂として、吾が前を拜くが如拜き奉れ」との御神勅は、歴代の天皇にとって常に御心を清明になされる御修養の導きとなってゐることを御教示頂きました。

國武忠彦先生の御講義では、まづ小林秀雄は文学者といふより哲学的思索者であり人間の研究者であったと評価されました。その上で、「科学的」といふ現代思想（世界観）と終生戦ひ続けてきたのが小林秀雄であり、「知る事と感ずる事が同じであるような、全的な認識」これこそが学問であると熱く語られたことが大変印象に残りました。昭和三十六年の雲仙合宿を契機とする小林氏との邂逅が先生のその後の人生を決定付けたと言っても過言ではない程、氏に対する心酔の深さがひたひたと迫って来るやうな素晴らしい御講義でした。

このほか、小柳志乃夫先生の御講義では、明治天皇をはじめとする歴代天皇の御製を拝誦することを通じて、天皇のお祈りと君民一和の国柄のありがたさをしみじみと感得させて頂きました。

また、青山直幸先生からは短歌創作に関する懇切な御指導を頂くと共に、正岡子規や橘曙覧や与謝野晶子の短歌を御紹介くださり、それぞれの人柄や作風などに思ひを寄せることが出来ました。さらに、折田豊生先生には、創作短歌全体批評において小生の短歌を取り上げてくださり、実に的確な添

慰霊祭。戦時平時を問はず、祖国日本のため尊いいのちを捧げられた全ての祖先のみ霊をお迎へし、祭儀は斎行された。

削指導をして頂き感謝に耐へません。

なほ、今回の合宿研修を終へての私の感想を短歌でまとめると次の通りとなります。

学ぶほど己に足らぬもの見えて求むる道のいよよはるけし

合宿初日研修室にて

去年の夏共に学びし友どちとまた会ひえたることぞ嬉しき

運営本部各位の御苦労を思ひて

この集ひ陰とやなりて支へたる人の誠のただありがたし

かくなるは心尽くして学びなむいにしへ人の熱き思ひを

として日本の歴史の中にいらっしゃることへの喜びでした。

師曰く古典を楽しむ心あらば物のあはれの思ひ湧き出づ

小柳志乃夫先生の御講義で御製を拝して

天皇も国民のごとをさな心悔ゆる思ひを抱きたまへり

すなほなるをさな心を歌ひ継ぎ日本の国柄守りてゆかん

天皇の御心我らを温かくつつむが日本の国柄なりけり

〝共感〟という言葉

（祐誠高校教諭　小林国平　37歳）

御殿場には二人の教え子が待っていてくれました。「久しぶり。よう来たなあ。」握手を交す喜びから始まった合宿教室でした。

各御講義の中で一貫して大切に思えたのは〝共感〟という言葉です。古事記など古典に対する共感、本居宣長・小林秀雄など先人の言葉に対する共感、共に学ぶ友への共感。福田恒存先生の言葉から、過去に対する経験に挑まねばならない。それは先人の言葉に触れ共感することである、と学びました。小柳志乃夫先生の御講義の中で多くの御製に触れることが出来ました。感じたのは、畏れ多い程の有難さであり、しかし同時に、身近な御存在にも思え、そのような天皇陛下が連綿

感慨もひとしほでした

（㈱柴田　柴田悌輔　75歳）

久しぶりに「フリー」ではなく、班に加入したお陰で、充実した合宿を體験できました。この合宿の「目玉」は、やはり班別研修にあると、改めて実感した思ひです。長谷川三千子先生の講義では、日本民族の持つ神話は、一神教の「聖典」とは違ふといふ點に、改めて考へさせられました。ご著書「神やぶれたまはず」にある通り、日本の神は「死にたまふ神」なのです。それであるからこそ、昭和天皇の御製、「爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも」の一首が、私達國民の心の琴線にふれるのではないでしょうか。國武忠彦さんの講義は、私にとっては、ただただ懐かしさを感じるものでした。五十年以上昔に、國武さんを中心にした読書会で、小林秀雄の著作の素晴らしさを、語った彼の姿に感動して、私は小林さんの著書に接する様になったのですから、感慨もひとしほでした。

參加者の一体感が強く感じられた合宿であった

（三菱地所㈱　青山直幸　66歳）

今回の合宿は、天候に恵まれず、学生参加者も少なかったが、半面、参加者全員の交流の時間を作る等運営側で工夫をして戴き、参加者の一体感が強く感じられた合宿であった。

講義は、いづれも、日本文化や国柄の本質に迫るものであり、内容の濃いものであった。ことに、長谷川三千子先生の〝三種の神器〟の意義を記紀の文章に沿って、説いてゆかれたご講義は、画期的な内容であったと思ふ。このテーマは、長谷川先生の御指導を戴きながら、我々も今後研究し、深化させていくべき課題であると思ふ。

今回、私が、短歌導入講義を行ったが、果たして充分に役割を果たし得たのか、と不安も残るが、折田豊生さんが全体批評で、実にキメの細かいフォローをして戴き、有難かった。

小柳志乃夫兄の講義を聞きて

しづかにも心を込めてあまたなる御製読みゆく友は気高し

世の中は移りゆけども歴代の天皇方の御心変らず

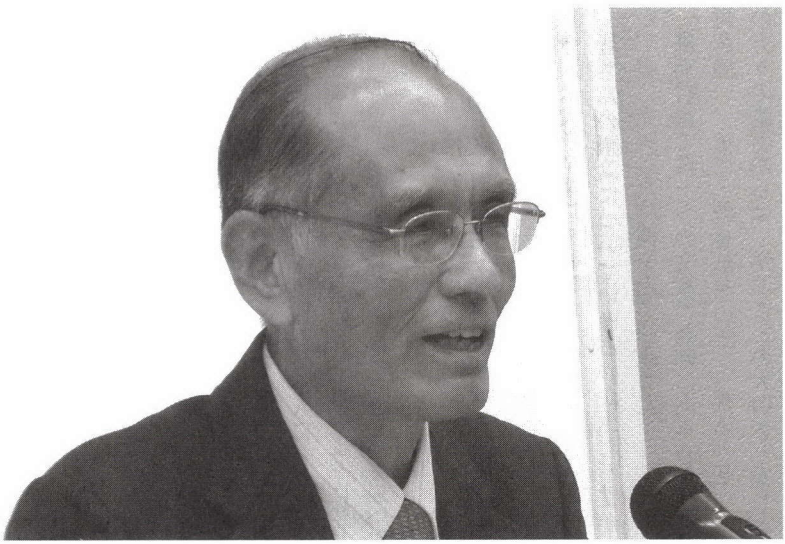
神に祈り民思はるる御心を仰ぐ国柄守りゆきなむ

一筋に連なる君と民の信を思へば胸の熱くなりゆく

國武忠彦さんの講義を聴いて

若き日に書讀む樂しさ教へける先輩の語調は變らざりける

書讀みてあふれくる思ひ語りゆく先輩の言葉は氣高かりけり



合宿をかへりみて。今林賢郁理事長は合宿を振り返り、そこに一貫してゐたのは日本は一体どういふ国かといふ問ひ掛けであったこと、そしてそれを知識としてだけでなく自分の身に沁み入るやうにし、やがて自分の言葉で語れるやうになって貰ひたいことを強く訴へられた。

第二十五班―男子社会人―

関西でもこつこつやっていきたい

（西日本電信電話㈱　武田有朋　33歳）

今回の合宿は、導入講義と長谷川三千子先生のご講義を拝聴することができ、大変よかったと思ふ。また、大先輩方と同じ班に所属することができ、班別研修が非常に興味深かった。かういふ学びの場が大切だと改めて思った次第であり、関西でも輪読会をこつこつやっていきたいといふ思ひを新たにした合宿であった。

合宿地に友と向かひて
合宿に共に行かむと同級の友を誘ひて御殿場に向かひぬ
車中にて過去の合宿の思ひ出を語り合ひつつ合宿地に向かふ
来し方を振り返りたれば次々に思ひ出話の出できたりけり
御殿場での合宿教室は十一年振りと気づき驚く

聖徳太子の御業こそ大いなる指針では

（加来至誠　66歳）

実に久しぶりの合宿、まことにうれしく存じました。あいにくの天候で、富士山を仰げず残念。運営上のご苦労をお察しします。雨天でも学びの体制が確保されていたのはよかったと思います。

長谷川三千子先生のご講話は、丁寧で含蓄に富み、その温かなお人柄に感銘を受けました。

また山口秀範講師の熱情に打たれました。班別討論の大切さを再認識しました。

聖徳太子がカリキュラムの中に現れていないのはさびしく思われました。種々の考慮からの現状と思い、また当会の活動にあまり参加していない身でこのように述べるのは申し訳ありませんが、人間性を深く洞察された上で菩薩行を実践された太子の御業こそは、現代の日本人にとって大いなる指針となることをより強く打ち出されて良いように感じられます。

その心ありがたきかな久しくも会はざりし吾を迎へたまひて

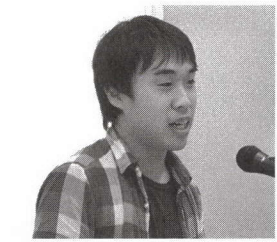
これからの生き方もよく考えてみたい

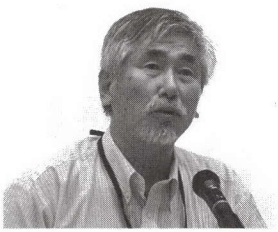
（㈱日立製作所　河合忠雄　66歳）

今回は大学卒業以来45年ぶりの参加となりました。皆さんの議論についていけるのか少し不安がありましたが、実に充実した時間を過ごせました。

班別討論では一つの文章に真剣に向き合うことの大切さを再認識し、更に〝教育勅語の話〟〝神話の話〟に関する講師の方々の講話からは、学ぶことの大切さと楽しさを教えられました。

やはり普段の社会生活には無い緊張感の強い合宿教室で、





全体感想自由発表。「皆に溶け込め大変勉強になった」「長谷川三千子先生の神話の話に感動した」「御製を通して天皇のご存在の意義を知った」「人に寄り添ひ、おほらかで、素朴な宣長の心を垣間見た」「短歌の相互批評で心を通はせ合ふ体験が出来た」「国や歴史について学び日本人としての幸せの根底は何かを感じた」「熱意ある講義を通して古典に触れる共感の力を学んだ」「祖父や先達から学び、日本をもっと深く知りたい」「御製を通して民の喜びを喜びとする君民一体の国柄を学び、日々の仕事に真剣に取り組むことがそれに繋がることを学んだ」「戦後見失ったものに改めて気づかされた」「十七条憲法から教育勅語へとつながる縦の流れとそれを生かす横の関係を学んだ」「友とのつながりを続けたい」「古典が歩み寄ってくるやうな輪読をしてみたい」など様々な感想が率直に発表された。

少し気力もリフレシュし、これからの生き方も良く考えてみたいと思っている次第です。

教育勅語の講義を聴いて

切々とよりよく生きるを説く君の熱き想ひに目を潤ませり

私自身の立場でが大切

（大成建設㈱　川井泰彦　63歳）

教育勅語の一節「一旦緩急あれば義勇公に奉じ」とは、日本国が他国に攻められた時は、国民は武器をとって戦う、とのみ解釈していました。山口秀範先生の御講義をお聴きし、班別討論を経て、和気清麻呂が毅然として僧道鏡に相対した如く、国の危機に際して、勇気を出して正しいと信じる行動を私自身の立場でとっていくことが大切なのだと思うに至りました。

本当に久方振りの合宿でしたが、もっともっと勉強しなければと思います。そしてよりよく生きていきたいと思います。有難うございました。皆様に心より感謝申し上げます。

亡き父を偲びて心によみがへる教へかしこみ家訓創らむ

昭和天皇の深い人生観

（元新潟工科大学教授　大岡　弘　68歳）

合宿中、無理のない話され方、ホッとさせられる話され方とはいいものだなあ、と感じたことが、しばしばあった。また、

昭和天皇の御製、

七十歳になりて（四首のうちの一首）

よろこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆきいまはなそぢ

について、「よろこび」も「かなしみ」もあったが、ここには「あやまち」といふ言葉のやうな余計なものの入ってゐない「民と共にすごした」共有の経験が詠まれてゐるとの、小柳志乃夫先生の御指摘には、昭和天皇の深い人生観が読みとれるやうな思ひに誘はれた。

閉会式での今林賢郁理事長御挨拶をお聴きして

みづからの力でおのれを作れとの強き御言葉心に残れり

言ひ忘れたこと

（熊本市役所　折田豊生　64歳）

創作短歌全体批評のときに一つ言ひ忘れたことがあった。短歌は人の、人生の、日常生活の反映であるから、それらと同じく完全といふものはない。よりよい作品に仕上げていくことが修練であると言ったのだが、よい歌をつくるには極めて簡明な前提があった。

それは、よき人であれといふことだ。よき人はよき歌を生み、あしき人はあしき歌を生む。あしき人がよき歌を詠むならば、それは詐欺である。

玉と剣と鏡が、富と安全と道徳の象徴であるなら、短歌を

つくることは鏡を磨くことに外ならない。
合宿終了前の清掃の時間に、それぞれの作業の様子を拝見しながら、短歌の修練はすでにここにあるといふことを改めて思はされた次第である。
参加者は少なかったが、記念すべき六十回合宿が無事に終了してよかった。

省れば恥ぢ入ることの多きかな心の鏡は曇りがちにて

第三十一班―女子社会人―

女子班の中で研鑽して

（天本和馬　65歳）

三泊四日の時間制約のある中でよく練られたスケジュールだったと思ひます。女子三十一班の班長を指名されましたが國武忠彦先生のお力で何とか務めを果たす事が出来ました。
班員の約半数の方が合宿経験者で、しかも何らかの勉強会に参加している方も多く講義内容に対して違和感なく討論や輪読に向き合うことが出来ました。むしろ班員の率直・活発な物言いに驚くこともしばしばでした。この班に限ってはもっとヴォリュームのある合宿でも良かったのではと思ったほどです。
講義では山口秀範先生の「聴く者の内面に切り込む」やう

閉会式。主催者を代表して澤部壽孫副理事長が、友と共に心を働かせながら学問を重ねて、真っ直ぐに生きて行って欲しい、と挨拶した。

な訴へに襟を正される思ひでした。長谷川三千子先生の静かな中にも凛としたお話ぶりが印象深く女性の真の強さを拝見した思ひです。班員の女性も「自分もかくありたい」との印象を語ってくれました。慰霊祭も室内でしたが例年通り実施出来たことに感謝致します。参加者の心のこもった慰霊であったと思ひます。

この場所で又この年も皆ともに心打ちあけ学ぶうれしさ

生きた楽しい時間

（㈱ファイン　大島啓子　67歳）

久しぶりの合宿参加でした。今回は「班別短歌相互批評」が特に心に残りました。一人一人の歌に心を寄せ、不明な点は質問し詠者の心を推し量りながらあたかも各人が自分の歌のように言葉を選び整えていく。社会人班なので年令、経験、男女の別もありいろんな意見が飛び出します。そのようにして、詠んだ人も「これなら」と納得出来る歌になるまでの時は、一つ事を皆で共有しているという生きた楽しい時間です。久しぶりに貴重な経験をしました。

班別短歌相互批評

一人一人の心に寄り添ひ歌なほすことの楽しも心打ち解け
窓の外の樹を詠みたりと言へば皆雲かかりたる辺り見遣りぬ
恋の歌詠みにし女にその心詳しく問ひて言葉正しゆく
歌詠みし人の気付かぬ胸の内見えてくるかも相互批評に

沢山のことを学んだ

（内山慶子　63歳）

講師の方々のご講義で沢山のことを得ることができました。「よりよく生きるために」何をなすべきか、長い歴史の中で築きあげられ、伝えられてきたことを学びまたそのご努力を知り、想いを致し、感謝していくことが大切であることを教えていただきました。「古の神々が試練に遭いながら立派な神々になられていく」ように私たちも成長していくよう努力しなければならないと思いました。微々たる力ですが目の前のなすべきこと、なされなければならないことに力を尽くしていきたいと思います。「学んだことを自分の言葉で話せるようになる」ことが自立でき、また周りの人たちへ伝えていく大きな一歩だと思います。日本国民としての自覚を持ち自信をもって生きていけるように努力します。

感想発表を聞きて

若きらは皆を見据ゑて力こめ「よりよく生きる」と語り給へり

親子で学べたことに感謝

（日本語教師　鈴木のり子　52歳）

国民文化研究会の寛容なご厚意に甘え過去三年間、親子で合宿に参加させていただきました。娘の留学を機にもうこのような機会もなくなるものと思っておりましたが、このたび

思いがけず再び娘を参加させていただける機会を得、貴重な御講義の数々を同世代の方々とこのように集中して拝聴できることの意義を思い感謝を一層深くしております。

心中思ふこと

やはらかき心のままに学び得る若き日に吾子よ心して学べ
汝(な)が内に流るるいのちはみ祖(おや)らの守りしいのち心して学べ

本物の学びを体験した

（篠塚豊子　41歳）

初めて合宿に参加しました。この合宿では「本物の学び」が実践されていると感じました。時代に耐えてきたテキスト（古典原文）に先生と生徒（参加者）が同じ目線で向き合う。そして原文の言葉に集中していき言葉を通してその作者の思いに入っていく時間を過ごすことで緊張感を感じました。これこそが「学び」の意味だと思いました。和歌創作では不思議な感覚を味わいました。感情をそのままに表現しようとして混乱しましたが、感情を言葉で表現することで客観的に冷静に自分と向き合うことができました。さらに相互批評では作者の気持ちに寄り添い正確な言葉を探すことでお互いの感情が通い合う体験をしました。そしてこのようなことが神代より天皇から平民までおこなわれてきたことに大変驚きました。

若人らとここに集ひて日の本の永遠(とわ)の命を伝へてゆかむ

閉会式。伊藤俊介合宿運営委員長（右）は、自分から何かを発信し周りの人から意見を貰ふことが自分の姿を写す鏡となる、と訴へた。参加学生を代表してニューヨーク大学アブダビ校教養学部二年の鈴木茉莉菜さん（左）は、大学で日本のことを悪く言はれても反論出来なくて悔しかった。日本の歴史や思想を正しく身に付けて、自分が選んだ道を進みたい、と決意を語った。

共感する心を持った人々の集いに感謝

（一社）福岡中小企業経営者協会　横尾仁美　29歳）

私は仕事柄、大学生や若手社会人と対話する機会が多いのですが、信じるものや生きる指針のない若者が非常に多いことを心配しています。このような若者に是非この合宿教室に参加してここに集った皆さんの好奇心や探究心の深さ、志の高さを見せてあげたいと思いました。神々について語られる長谷川三千子先生や小林秀雄について語られる國武忠彦先生はまるで少年少女のように瞳がきらきらしていました。参加学生の質問は素直そのものでした。御製を通して歴代天皇方の御心に触れました。戦火に倒れた人々の心に寄りそう〝私〟を超えたお姿に真の平和を感じました。合宿で出会った皆さんは物事に共感する心を持った方々でした。私もかくありたいと思います。素晴らしい出会いの場をありがとうございました。

夕べには別れて散りし友どちの高き志（こころ）に我も続かむ

第六十回国文研合宿に参加して

（北九州市小学校講師　西山詩織　27歳）

今回の国文研合宿の参加は5年ぶりでした。学生時代お世話になった國武忠彦先生とも同じ班になり、私のことを覚えていてくださり、更に、同じ福岡縁の友人もでき、とても嬉しい三日間でした。

合宿では、長谷川三千子先生の「三種の神器」の講義が一番心に残りました。

私は、本合宿の前に、茂木健一郎さんの『化粧する脳』を読みました。その中には、次のような文章があります。

「わたしたちがいま必要としているものは、自分たちの外見を確認して整えるために使う鏡ではなく、古代の鏡が象徴していた、目に見えないものを映し出す鏡なのではないだろうか。それは、精神のあり様、言動、そして生き方そのものを映し出す鏡である。」

茂木さんは、同書で私たち人間は、鏡によって、外見を整え、他者から自分がどう見られているかを認知することを述べています。しかし、現代の課題として、目に見えるものを映し出す鏡だけでよいのかと疑問を投げかけています。それは、前記にあるように、「精神のあり様、言動、そして生き方そのもの」を整える鏡が今の日本人に必要だと考えられているからです。そこで、私は、ここにある「精神のあり様、言動、そして生き方そのものを映し出す鏡」「目に見えないものを映し出す鏡」とは、どこにあるのか、そして、どのように持てばよいのかという疑問を持ちました。そして、そのヒントは「三種の神器」の一つである〝鏡〟にあるのではないかと思い、長谷川先生のご講義を聞きたいと強く思いました。

合宿では、幸いにもご質問させていただき、とても簡潔に答えをいただきました。

「心即鏡」

この言葉が、この合宿で、私の心に一番残った言葉です。長谷川先生は、続けて「心は鏡でないといけない」とも仰りました。そして、分かりやすく仏教の「悟り」の話も取り上げてくださいました。悟りとは、水に映る月であり、水の表面が平なら、遠い月の光も映し出す。そのように、曇りない、明らかな、清らかな心、無私の心を常に自らの心とする。それが「心即鏡」の意味だと私は捉えました。そう思うと、ご講義の中で出てきた天照大御神のお言葉がよく分かりました。

天照大御神が天忍穂耳尊（あまのおしほみみのみこと）に向かって、

「吾が児、此の宝鏡を視まさむこと、当に吾を視るがごとくすべし。与に床を同じくし殿（おほとの）を共（ひとつ）にして、斎（いはひ）鏡とすべし」

※斎…心を清めて神をまつること。

ご講義の中でも述べられましたが、ここにある「床を同じくし殿を共にして」とは、鏡を生活空間の中に常に置いておけという意味です。私は、長谷川先生のご講義を聞き、「目に見えないものを映し出す鏡」とは、自己の心の内にある鏡を言うのだと思いました。そして、それを如何に清く明るく保つか、その鏡が曇らぬよう、常に心を振り向けて日常を過ごすか、そうありたいと思う決意を持ち続けることが大事だと感じました。

みづからの心の内の鏡をば水面のごとく平らかにせむ

天照神の御姿みえるやう常の心を澄ましゆきたし

来年に向けて力を得た

（昭和音楽大学名誉教授　國武忠彦　77歳）

事務局、指揮班運営委員会の皆さま御苦労さまでした。御礼申し上げます。

参加者は少なかったかも知れませんが、私にとりましては大変中味の濃い充実した合宿でありました。今回の合宿を振り返り甦らせながら来年まで一年間を過ごしていきたいと思います。九州からの参加者が多かったので、来年の関東地区での合宿が心配です。何としても来年の関東合宿は百名を目標に各自で何をすればよいかを考えながら頑張っていこうと思います。参加者からこの合宿が意義あるものであることを聞かされて嬉しく、頑張らなければならないと思いました。これだけの合宿は一人ではできません。皆んなで力を合わせて初めて出来ることです。今年は私は女子班の班付きをやらせていただき社会人の女子の方々と親しくなりました。合宿後もメールで便りを出し合い話し合っていくことにしています。楽しくなりました。ありがとうございました。

これからも共に文よむ友を得てありがたきかなこの喜びは

第三十二班―女子社会人―

合宿教室六十年の成果

（中島法律事務所　中島繁樹　67歳）

第六十回といふ節目の集会がとどこほりなく遂行され終了したことを大変うれしく思ひます。事務局及び指揮班の方々のご努力に感謝します。

今回の合宿導入講義、古典講義、御製講義はいづれも、合宿教室六十年の成果を集大成し、その精華を表すものでした。各講師の方々が十分に勉強され準備された内容であり、申し分のないものであったと思ひます。

時事問題の講義がなかったのは仕方がないでせう。三泊四日では時間が足りません。

私は初めて女子社会人班の班長を経験しました。班での短歌相互批評のときに、班長としてどのやうに意見を述べたらいいか迷ひました。私の意見が班員の方々の作歌に多少なりとも役立つことができたのであればよかったのですが。

御製に感動した

（華泉書道会　坂本和代　64歳）

四日ゐて富士のいただき見ぬままに御殿場を去ることもめづらし

第六十回全国学生青年合宿教室に参加させていただき、有難うございました。

「家訓」から始まった講義にわくわくしました。自分がどう生きるか、縦と横のつながりは、と聞いているうちに、もっと日本を知りたいと思いました。第一にすることは、縦の流れをよくすること、その為には古事記から始まる古を知ること、それは天皇の御製を知ることではないかと思いました。

どの御製を聞いても読んでも感動します。天皇は生まれながらにして天皇なんだ、天職なんだと、明治天皇の御製に強く感じました。特に「千万の民とともにもたのしむにますたのしみはあらじとぞおもふ」です。そして、とても気になる「手ならひをものうきことに思ひつるをさな心をいま悔ゆるかな」を発見して、明治天皇に親近感を感じました。

第二に横の流れを大切にし国訓が生きるよう頑張ります。

初秋に富士の裾野で霧のなか友と学びてうれしかりけり

誠で成り立って存続してきた合宿

（（公財）郷学研修所・安岡正篤記念館　嶋田元子　62歳）

四年前、靖国会館での講座を拝聴したのが、国文研との縁の始まりでした。

仕事柄、学生の来館者もあり、自分で体験してこの合宿を他人にすすめたいと思ったのが、参加のきっかけの一つです。その感想は、ひと言「なんもいえん」の心境です。

開会式の時の内海勝彦先生の緊張された面持ち、されど指揮班長としてスムーズに何事も心配ないように行動されておられた対照的なお姿に、武士の心得を見たようでした。

登壇された講師の先生方の万感の思いを込められた誠の言葉。そして感想を述べた人たちの誠の言葉。この合宿は誠で成り立って存続してきたのだなということを実感しました。

この活動がもっと多くの人に、できれば高校生にも広まって、「この国を背負って生きているんだ」という意識を持つ人が増えるよう微力ながらお手伝いしていきたいと思います。

合宿のエキス述べらるる理事長の言葉はままにわが感想文

霧の中晴れし日の富士想像ししばし佇む掲揚塔前

万感の思ひ込めたる言の葉の一語一語に涙こぼるる

和歌を皆で詠むことに感動した

（元福岡県公立小学校教諭　久米由美子　61歳）

今回は、三十数年、毎年この合宿に参加したいと思っていた願いがかない、嬉しく思っています。

毎回たいへんな中続けてきていただいていることに感謝いたします。有難うございました。

古典がほんとうに楽しく感じました。また、古事記についてもっと知り、自分の言葉で伝えられるよう学んでまいりたいと思います。また、和歌の班別相互批評で、一人一人の班員の思いをくみながら、和歌を皆で詠んでいくことに、たいへん感動を覚えました。班長の中島繁樹先生や小田村初男先生にご指導いただけて、とても貴重な体験でした。中島先生は、鹿児島大学の大先輩であり、このように共に机を並べ講義を聞いたり班別で話をしたりする機会があろうとは、夢にも思っていませんでした。小田村先生は、日常では絶対お会いすることのないご存在の方で、ほんとうに感激でした。

すなほなる思ひを述べる若人の顔いきいきと輝きてあり

先人が残した道をつなぐ

（宗教法人太成殿本宮　高見澤玉江　47歳）

明るく親しい雰囲気は、また同じ方向を向いて学ぼうという共通の意欲あればこそで、自分を含め皆が真剣に耳を傾け吸収しようとしていた。その為には何か格好をつける暇もなく、無意識に自分を解放し、人の話も素直に聞いた。

長谷川三千子先生のお話が心に残った。民族の全身全霊を込め文字に遺し伝える重要性、国のあり方を伝える真剣な切実な願いは、民族全体で意識しなくてはならないことを、改めて教えて頂いた。

書ききれないまだまだ沢山の学んだ大切なことは、ひとつでも自分から伝えていく努力をして、先人の残して下さった道のほんの一部分でも、つなげる勤めを果たしていきたい。

御講義下さいました先生方、合宿運営をしてくださいました皆様に心より感謝申しあげます。貴重な機会をありがとう

ございました。

拙しと恥ぢる我が歌すなほなる心読みたるつもりなれども

神話より続く国柄守りたる名もなき民と我もなりたし

霧よ去れ我が目は慣れし姿とて友に見せたし富士の頂

熱い思いがあふれる講義

（一社）福岡中小企業経営者協会　福元晶子　44歳）

素晴らしい講義を受講することが出来、貴重な経験をしました。特に印象深かったのは二つの講義です。

一つは山口秀範先生の導入講義で、先生の生き生きとした、そして熱い思いがあふれる講義には胸を打たれました。最後に声をふるわせながら仰った「一生の友をつくれ」との言葉は、今自分にそう言える友がいるか、自分の本音を熱く語り合える友かということを考えさせられる重いものでした。

もう一つは小柳志乃夫先生の御製についての講義です。御製を読むのは初めてでしたが、いかに歴代の天皇陛下が民に寄り添い、民を思っていらっしゃるかが和歌から読み取れ、感激しました。そして、小柳先生が涙を流しながら陛下のみ心について話をなさる姿に、感動しました。

残念だったことは、和歌をつくる時間が少なかったことです。初心者の私には時間が足りず、悔しい思いをしました。

壇上で御製について語る師は思ひあふれて涙ながしぬ

御製にて詠みたまへりしみ心に初めて触れて心打たるる

率先して陛下をお支えしたい

（日本青年協議会　椛島明美　26歳）

山口秀範先生はご講義の中で、杉浦重剛先生の皇太子裕仁親王殿下に対する十一回の教育勅語のご進講について紹介されました。杉浦先生は、当時の殿下に対し、殿下ご自身も実行せられると同時に、いかにすれば臣民をしてこの道に進ましむるかに留意せられるようにと仰いました。

昭和二十一年一月に発表された「年頭国運振興の詔書」の中の一文「朕躬ヲ以テ衆ニ先ンジ」に目が留まりました。これは、昭和天皇が杉浦先生の「いかにせば臣民をしてこの道に進ましむるか」の問いに対し、「衆に先んじる」ことを実行されたのだと思いました。終戦時の三首の御製はその極みに達したご心境だったのではないか、そう思われてなりません。

今回の合宿テーマの問いかけに対し私が答えをだすとしたら、臣民として率先して陛下をお支えする、このことに尽きるかと思います。

先んじて民の命を守り給ふ先帝陛下のみ心をろがむ

大君を支へ奉るは我なりと心に決めぬ学びの庭で

多くのことを学び多くの感動を得た

（元皇宮警察本部長　小田村初男　65歳）

今回の合宿教室もまた、多くのことを学び、多くの感動を

得ました。

山口秀範先生の導入講義に於ては、各家に家訓がある如く、国には国訓とも言ふべきものがあり、日本の国訓は教育勅語であるとの指摘があり、それまで考へたことも無かったのですが、なるほどと納得し、理解を深めることができました。

長谷川三千子先生の御講義でも、神話とは何か、三種の神器はいかなる意味を荷ってゐるのかについて、記紀にもとづいたお話があり、日本の国を大切にすべきことについて理解が深まりました。

国武忠彦先生の御講義、小柳志乃夫先生の御講義からも、この合宿を通しての一貫したテーマとして、日本の大切な国の在り方について示され、大変意義ある合宿となりました。

御殿場合宿の全体感想自由発表を聞きて

若きらは次々立ちて合宿で学ぶ楽しさ熱く語りぬ

国民文化研究会

歴史と文化の連続性につつまれた幸せ

（拓殖大学日本文化研究所客員教授　山内健生　70歳）

新たな「いのち」を注ぎ込まれた感じである。父祖から伝はって目の前にある「文化の命脈」に気づかないやうにする占領政策の遺制が牢固として存在してゐると強く感じた。もはや日本人自身が目覚め、克服すべき事柄であるが、それに考へ及ぶことのないやうにする占領遺制が幾重にも立ちはだかってゐる。

言ふなればどこの国も「孤立」してゐるのであって、頼れるものは自国のみとの生命的本能的な根本的姿勢が確立してゐて、それ故に手段として他国と結ぶことはあっても、根本は自国しか信じてゐない。だから他国も同盟の相手にしてくれるのだ。本当に情けない現状だ。「拉致」についても国家としての怒りを表明できない。

歴史と文化の連続性につつまれた幸せを参加するたびに感じてゐる。本当に稀有な国なのである。祖先、先人に恥ぢない生き方をせねばとあらためて強く思ってゐる。また新しい歩みが始まる。

閉会式にて

斉唱の歌声大きく講義室にとどろきわたれる力づよしも

かばかりに力みなぎる歌声のをちこちゆ湧きくる時の待たれる

大学人の一人として努力したい

（東京大学教授　伊藤哲朗　66歳）

今回は、合宿教室開始以来、六十回目という節目の回であったが、時代や学生を取り巻く環境の変化故に学生の参加数も往時と比べても大変少なくなってしまった。班別研修に参加してみると、参加している学生一人一人は、往時の学生と

変わらず講義で語られた諸講師の訴えを、素直に受け止め消化しようと努めている姿が見られたが、話を聞けば学内では合宿におけるような学生同志の真剣な会話や勉強をする機会は全くないと言う。これでは合宿に参加してみようという問題意識も持ちようがないと思われた。

講義では講師の方々が皆、わかりやすく大事な事柄を伝えようとする熱い思いがひしひしと伝わる良い講義ばかりであった。講師の方々に厚く感謝申し上げると共にその講義内容に敬意を表し申し上げる。

こうした講義の内容に学生が触れる機会を、合宿の場においてだけでなく日常の場においても増やすことができるよう、大学人の一人として国文研の会員の皆様と共に今後努力して行きたいと思う。

最後になりましたが、合宿の運営に当たられた運営委員、指揮班、事務局の皆様に心から御礼申し上げます。

第六十回全国学生青年合宿教室に臨みて

六十年（むそとせ）の長き歴史に人々の積み重ね来しいたつきを思ふ

若き日に学びしことを若きらに伝へ続けて六十年の過ぐ

（西松建設㈱　蔭山武志　39歳）

第六十回の記念すべき合宿は、本部に所属ということで裏方としての参加であった。伊藤俊介運営委員長の指揮のもと、本部→指揮班という組織で機能する運営体であった。にわかに組織された年に五日の活動は当然そうすんなりいかないのであるが、個々の意識が高いこともあり、特に大きなトラブルもなく最終日が迎えられ、非常にうれしく思った。

短歌創作の時にふと感じたのが、短歌は心に強く感じたことを表現するものであるが、これまでのようにすんなりと書きたいテーマが出てこない。この時初めて班研修というものが思っていた以上に充実したものだったのだなと気付き、それもまたいい気付きであったと感じた。

合宿本部の仕事を初めて経験して

裏方の仕事は大事と知りつつも班研修をうらやましく思ふ

運営本部

班別研修の意義に気付いた

指揮班

切磋琢磨して務めたい

（元神奈川県立小田原高校教諭　原川猛雄　67歳）

三泊四日の合宿も終はりほっとしてゐます。今回は指揮班のメンバーとして参加させていただきましたが、十分お役に立てたのかどうか心配です。自分では精一杯やったつもりで

すが。私よりロートルの澤部壽孫さん、山本博資さんが一生懸命に資料の印刷や冊子づくりに働いてゐる姿を見て、驚き励まされました。島津正數さんは事務局の仕事をしながらカメラマンもされてゐて本当に大変だったと思ひます。

普段会へない人達にもお会ひでき、共に過ごすことができて良かったと思ひます。自分一人ではない、志を同じくする友達がゐるのだと改めて感じ、ありがたく心強く感じました。これからもお互ひ助け合ひ、切磋琢磨して務めて行きたいと思ひます。

伊藤俊介運営委員長、内海勝彦指揮班長をはじめ運営にあたられた方々、お疲れさまでした。ゆっくり休んでいただきたいと思ひます。

事務局にてご講義を聴きて（国武忠彦先生、小柳志乃夫先生）

鉛筆を走らせつつも聞こえくる師のみ言葉に耳傾ける
遺されし古典に我もあらたなるいのち吹き込み学びゆきたし
御身はあとに民やすかれと祈り給ふ大御心の有難きかな

最知浩一君と語りて

三年前の大震災に父君を亡くし給ひしと友は語りぬ
高台に避難せしあと大津波襲ひて父君みまかりましし

友らと連絡を交はしていきたい

（若築建設㈱　池松伸典　59歳）

三泊四日の短かい期間であったが、充実した時間を過ごした。今回は指揮班であったため全ての御講義を直接に聴くことはできなかったが、記紀、御製の御言葉を丁寧に味はせて頂き、改めて古へより伝へられてゐる尊きみ教へに感動させられた。ややもすると日頃の生活に追はれ忘れがちになり、心が満たされない状況になりがちであるが、時折尊き御言葉にふれ、自分を思ひ出すことの大切さを教へられた。そのためには一人では難しいことでも友らと語り合ふ中で感動をもってよみがへってくるものだと思ふ。今後時間を見つけ、友らと会ったり連絡を交はしていきたいと思ふ。

富士の嶺のふもとに集ひ学び合ひ心豊かに感ぜられけり
古への尊き教へのよみがへる六十年続きしこの集ひはも
いたづきに時過る間に時折は友らと学び励みゆきなむ

事務局

国文研のあり方について

（元㈱講談社　磯貝保博　71歳）

小柳志乃夫さんのご講義を聞いて、国文研のあり方について感ずるところがありました。

明治天皇の御製〝すなほなるをさな心をいつとなく忘れはつるが惜しくもあるかな〟を紹介されましたが、合宿教室の営みを含め国文研の諸活動の根本には〝すなほなるをさな心〟

を持ち続けることが大事だと思ひました。
この心持ちを他人に要求するのでなく自らに課したいと思ひます。

国文研活動の持続発展を目指して
うつり世の動きとともに歩むとも幼な心を忘るべからず

我が家の「家訓」について考へてみたい

（ＩＳＭグループ本部　最知浩一　54歳）

合宿の導入講義で山口秀範先生が「家訓」について話され、教育勅語が我が国の「国訓」であり、明治維新の動乱期に国是として君臣一体となり国難を乗り越えて来た事を知り、とても勉強になった。山口先生は、「家訓を作る事は自分の価値観を示すことでもあると同時に、自分たちのご先祖様が何を伝へたかったのかと先祖様を思ひ出すことでもあり、また我々の先人達を偲ぶことでもある」と話された。

先生の話しを聞きながら、子供の頃よく祖母から「物をむだにしてはいけない。人様の物をだまって取ってはいけない」と語り聞かされた事を思ひ出した。優しさの中にも芯の強い祖母の事をなつかしく思ひ出す。

是非我が家の「家訓」について考へてみたいと思った。

山口秀範先生のご講義をお聞きして
家訓とは先祖（みおや）の思ひや先人の生きざま偲ぶこととのたまひぬ
師の君の言の葉聞けば亡くなりし祖母の面輪の思ひ出さるる

勉強を続けたい

（㈱ラック　髙橋俊太郎　37歳）

今年は私にとって生活が大きく変わりました。とある縁により、四月から岡山へ転勤となり、仕事、私生活が一変することとなりました。その中で、仕事のプレッシャーでへとへとになっている所でこの合宿に参加し、はっとさせられる事がありました。それは、全体感想発表で発表者の方が山口秀範先生の「日々をより良く生きる」という言葉を引用されて、「仕事に流されるだけでは駄目で、勉強していきたい」といった旨の言葉を聞いたことです。私自身も仕事と家の往復だけになっていて、どうしたものかと考へていたところでもありましたので、この言葉を思い出し、拙いながらも勉強を続けたいと思います。

感想を述べる言葉にうなづけば我が身のこともふり返るかな
事務局作業にて
山積みのお礼の手紙を折り終はり合宿日程の終はりを感ず
指揮班長の最後の連絡を聞きて
終了の宣言聞きて本当に合宿終はりと一息つけり

合宿中に創作された「短歌詠草」

――しきしまのみち――

短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多くの短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなってをります。従って、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとって、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠った言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行った様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深浅、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直に歌ひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」とよんできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによって、人間にとって最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合ってきたのです。先祖の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に先祖の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく先祖とのつながりをもった日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。

現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとって最も根源的な心の問題がなほざりにされてゐます。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一歩でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同士の相互批評によって集中的になされてゆきます。心の奥底に眠ってゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして豊かな人間性を取り戻さうとする試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目の午後、国民文化研究会会員の青山直幸氏（三菱地所㈱）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌ただしい日程の中で生み出された短歌ではありますが、作者の集中された内心の働きがはしばしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠ってをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・印刷のための清書作業を通じて、翌日には歌稿となって参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに国民文化研究会会員の折田豊生氏（熊本市役所）によって、短歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた講評の中で作者の一語一語に含まれる心を偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。

その後、班ごとに班員全員による相互批評が行はれ、各自の短歌の表現をより正確に添削し合ふことを通じ互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において、寝食を共にし、胸中を披歴し合って来た友情の結び付きが、一段と確認されました。

短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者一人一人に、言ひ知れぬ喜びをもたらすこととなりました。

ここに収録された短歌の数々は、班員の心を集結して推敲・添削されたものです。その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読み取りいただければと、心から祈念する次第です。

短歌詠草（しきしまのみち）合宿第一回目の創作作品

（班別相互批判をして添削された作品です。尚、第二回目の作品は感想文の末尾に収録。）

第一班

㈱ロゼッタ　髙木雅史

合宿発表の準備をせし折
夜更けまで机に向ひ悩みつつ友らに語る言葉選びぬ
十年前抱きし想ひわづかでも若き友らに伝はれと思ふ

埼玉大学　経　三年　佐藤勇気

終戦の日に御殿場で玉音を聞き給ひたる悔しさを思ふ

日本大学　法　三年　名和長高

宮さまの開き給ひし窯（かまど）は今石で閉ざさる主（あるじ）無くして

立命館大学　法　二年　小野寺崇良

小雨降る殿下の森に立ち並ぶ桧の木々の息吹を感ず

佐賀大学　文化教育　二年　藤近晃久

出会ひし子らと「あっちむいてホイ」をせし折
繰り返し「もう一回」と指を向けせがむ子どもの姿楽しき

京都産業大学　経営　一年　舩岡龍一

ただ一人はるばる富士の合宿へ友求めんと我は来たりぬ
夜ふけまで友と語らふ我が進むゆくべき道を探し求めて
君想ふこの苦しみはわかるまじただひたすらに想ひ続けむ

熊谷拓也

秩父宮記念公園にて

公園のしだれ桜は堂々と枝を広げて美しく立つ

福岡大学　経　一年　匹田己晶

富士の山一目見たしと来たれども雲のおほひて見えぬぞ悔し

興銀リース㈱　小柳志乃夫

山口秀範先輩のご講義を聴きて

信ずべき友吾にありと心熱く語りたまへる御言葉強し
万感の思ひを込めて若きらに友持つべしと訴へたまふ

長谷川三千子先生のご講義を聴きて

にこやかにまたゆっくりと語りますお話に自づひきこまれゆく
バーベキューに興じたまひしそのかみの合宿にありし友らなつかし
国文研の先生方の学問の道統改めてかしこみ思ふ
いつもながらかみくだくごと丁寧にまた明晰に語りたまへり

第二班

崇城大学　非常勤講師　白濱　裕

合宿地に向ふ

いくたびも電車乗り継ぎ友ら待つ合宿地に向ふ心せきつつ
この日まで数多（あまた）心をくだきつつ準備に当れる友ら尊し
み国今ただならぬとき友どちと心合せて語りゆかなむ

杉浦重剛教育勅語御進講

東西の故事を引きつつ東宮に心尽くして説き賜ひしとふ

國學院大學大学院　文学研究科　二年　島岡昇平

秩父宮記念公園
宮様の功をしのぶ人々のおもひこもれる記念公園
富士山に向ひて立てる宮様の登山姿の銅像のあり

佐賀大学　聴講生　吉岡勝也

山口秀範先生のご講義をうけて
国のためよりよく生きむと吾もまた「教育勅語」を学びゆきたし

秩父宮記念公園に来て
正門にいたれば雨の降り止みて不思議におもひ空を見上ぐる
進みゆく道の片はら並び立つヒノキの梢雨を遮ぎる

福岡教育大学　教育　聴講生　前川大基

戦況を案じられる殿下の御歌を拝して
戦況を聞けば聞くほどもどかしき心つのりて安らぐ間のなし
戦ひの最中にありて何ごともできぬ殿下は「いらだち」隠さず
戦ひの終はりを告ぐる放送をいかなる思ひで聞き給ひしか

福岡大学　経　四年　福岡　潤

夕暮れて静寂の森を一人行けば冷気迫りて秋近みかも

國學院大學　神道文化　三年　横川　翔

宮様の公園にて詠める
垂れこめし雲にかくれし富士ヶ嶺うまし御姿明日こそ見たし

三井甲之先生に（詠「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを」）
明日にまた慰霊祭にて大人の歌唱へらるるが待ち遠しかり

九州産業大学　商　三年　下田幸美

秩父宮記念公園にて
森の中歌を詠まんと思へども心に浮かぶ恋人のこと

皇學館大学　文　二年　江崎義訓

秩父宮記念公園の宮様と妃殿下の壕を拝見して
爆撃に備へし壕は黒々と霧雨に濡れ光りて見ゆる

元富山県立富山工業高校教諭　岸本　弘

秩父宮記念公園をめぐりつつ
合宿のひと時を割きて宮様をしのぶ記念の公園を歩む
丈高き檜の林歩みつつ心のなごむひと時うれし

山口秀範先生御講義　教育勅語
国の訓と友は語れり千年まりのみ祖の祈りこもれる勅語を

第三班

折尾愛真短期大学　松田　隆

秩父宮記念公園を散策して
宮邸の水琴窟の水の音が静かに響き我癒さるる
宮邸のしだれ桜の大きさよ花咲くさかりの美しさを思ふ

専修大学　経営　四年　芦田和久

明治天皇の定めおかれし国訓に聖徳太子の憲が生きてゐるなり

福岡大学　科目履修生　小林拓海

大津波に吾子の墓まで流されし親に想ひを馳せればつらし
「砂まみれの吾子の遺骨を持ち帰る」御親の上を想へば苦し

早稲田大学　政経　四年　北林裕教

合宿導入講義後の班別研修の折りに
「現代の国訓は何」と班友の発したる問ひは的を射たりき
班友の問ひをたづきにご講義の内容次第に深まりゆきぬ

広島大学　経　四年　野田　巧

改めていにしへ人に鑑みて我が道探す富士の

合宿

九州産業大学　経　三年　八巻憲郎

雨雲に隠れて見えぬお姿に想ひは積もる富士の雪ほど

甲南大学　経　三年　富山晴希

静寂な防空壕に入りみて戦時の人に思ひをはせき

福岡大学　経　一年　河村拓輝

富士の山厚き衣を身にまとひ頂きあたりは今日も見えざる

元福岡県立直方高校教諭　小野吉宣

室内朝のつどひの折に

雲あつくとざしてをれば富士の山姿見えざり期待しけるに

発声の練習すれば心地良き気持沸きたりいざ歌はなむ

森田氏の導きありて友皆と声を合はせて「富士」（の山）を歌ひぬ（森田仁士氏）

友皆と霊峰富士を仰ぎたく空よ晴れよとひたに歌ひぬ

第十一班

元山口県立熊毛南高校教諭　寳邉矢太郎

合宿導入講義にて

祖父（おほぢ）の君のこしたまひし大みふみのをしへ学ばるる若き殿下は

大みふみの心伝へんと（杉浦）重剛（しげかた）はこころくだきて仕へたまひぬ

いつとなく殿下の奥処（おくど）にみをしへのこころとどきて年ふりにけり

戦を止めしみこころを詠みたまふ三首のみうたよろづよまでも

猛鳥の襲来に雛まもる親を涙して思ふと侍従語りき

明星大学　教　四年　江崎真穂

野外研修にて

わづかでも富士山を見むとかすかなる雲のすき間に目をこらしゆく

限界まで目を凝らせども厚みある真白き雲が立ちはだかりし

男の子一人泣きだしさうにまゆをよせ笑顔で走る子らのあと追ふ

九州工業大学　工　三年　高野真里

公園をめぐりてゆけばなつかしき恩師に出会ひて心躍りぬ

そぞろゆく道に出会ひし我が師へと思ひのたけを語らひにけり

中村学園大学　流通科学　二年　梅﨑理恵

秩父宮記念公園母屋にて

大噴火の名残りの灰は庭園の砂利と変はりて昔を残す

ニューヨーク大学アブダビ校　教養　二年　鈴木茉莉菜

秩父宮記念公園にて

眉を寄せ友等のあと追ひ懸命に走る男の子の気遣はれけり

高知市立青柳中学校教諭　岡　つぐみ

なつかしく思ひ出さるる学問を共にしたしと班長言はるる

古典（ふみ）をよみ味はふことは常ならぬ想像力の求めらるると

㈱ファミリーマート　平井仁子

「よく来たね」と迎へてくれる先輩の優しさに触れ心安らぐ

第二十一班

ハローワーク福岡南　古川広治

六十回目の節目を迎ふる合宿に力つくさむと御殿場へ向ふ

指揮班でむかへむものと思ひしが名札を見れば班長なりき

さはあれど心つくして務むるに変はりはなしと気を引きしめぬ

上天草総合病院　福田　誠

合宿会場にて
目の前を覆ひし霧の晴れゆけば富士の裾野の見え初めにけり

秩父宮記念公園
立ち並ぶヒノキの林と野の花の公園の小道を友らと巡りぬ
をりをりに咲ける花木に囲まれし茅葺の邸に静養されしとふ
日の本の花に混りて西洋の花植ゑまして慰め給ひけむ

日本ベーリンガー・インゲルハイム㈱　出村信隆

秩父宮記念公園にて
大空にますぐに伸ぶる竹のごと我が子も育てと今日も願ひぬ

㈱日本教文社　坂本芳明

秩父宮記念公園にて
宮邸の母屋へつづく石だたみは先の御帝も歩まれしといふ
質素なる調度のならぶ母屋にて御病いやす日々を過ごされしか
終戦をこの宮邸でむかへられし宮様方の御心しのばむ

中村学園大学　内場真一

長谷川三千子先生の御講義を聴きて
鏡玉剣に込められし意味合ひを尋ねゆかむとの思ひおこりぬ

全日本学生文化会議　清川信彦

合宿導入講義を拝聴して
自らが如何に生きるか問はずして日々を送りし我に気付きぬ
先生の「よりよく生きるために」とふ言の葉胸に深く残れり

国運振興の詔書を拝して
国民の先頭に立ちて国運を開き給ひぬ昭和天皇は
昭和天皇を仰ぎて我も学生の手本たるべきリーダーとならむ

埼玉県庁企業立地課　飯島隆史

山口秀範先輩の御講義を聴きて
先輩は若き日のごとわきいづる胸の思ひを熱く語りぬ

秩父宮記念公園を訪ねて
宮様のゆかりの館友どちと語り合ひつつ巡るは楽し
ひさびさに合宿に集ひ友どちと若き日のごと語り合ひたり

第二十二班

日本青年協議会　外村聖典

秩父宮様が療養された別邸の前にて
御殿場の富士の裾野に宮様のわらぶき母屋静かに建てり
スポーツと登山を好まれし宮様は富士眺めつつ思ひはせしか

森重忠正

旧秩父宮別邸を訪ねる
茅葺きの母屋の中の「西の間」で玉音放送聞かれしといふ

チャンネルＡＪＥＲ　佐藤和夫

御殿場の夏合宿に参加して
東富士の演習場で汗流す若き日のこと思ひださるる

小林　至

長谷川三千子先生の御講義後、みなで古事記を読みて
友どちと天地の初めの神々の御名声合はせ読みにけるかな
声合はせ読みゆくうちにいにしへの言葉の調べ聞え来るかな

農業　猪部敬彦

青少年交流の家の宿泊室に居りし早朝、

隣接の米軍基地より大音量で流れ来る米国歌を聞いて
大富士の裾野に響く米国歌御父祖の御霊如何にぞ思ほす

末次直人

長谷川三千子先生のご講義を聞きて

記紀学ぶ晩学者なれど好奇心は初学者のごとく多くありしと
天と地を三種の神器はつなぎしとふお話し聞きて合点し嬉し
さらにわれ遅くはあれど好奇心同じく抱きて学び行きたし

元小田原市立矢作小学校校長　岩越豊雄

青山直幸兄の短歌導入講義を聴いて

歌を詠むみちを説きたる我が友のみ言葉いたく心にしみる
花みつつ己がいのちのはかなさを歌ひし子規の歌のかなしも
佐久間大尉を思ふ晶子の歌よめばおのづと涙あふれくるなり

旧秩父宮別邸にて

まっすぐな桧の木々に囲まれし秩父宮邸の道すがすがし
火山灰を敷きたる小道の両わきに大きな芙蓉の花咲きにけり
しだれ桜の木々に囲まれ苔むせる秩父宮邸のかやぶきの家

第二十三班

㈱寺子屋モデル　西山八郎

帰りゆく友へ

一日の出会ひなれども帰りゆく友をし見れば別れ惜しまる
手をとりて別れ告ぐれば友もまたにぎり返して言葉くれたり
ねぎらひの言葉交はして笑む友は振り返りつゝさかりゆくかも

日本大学名誉教授　夜久竹夫

秋の雨上がりて輝く木の緑あざやかに光り心洗はる

㈱ライフプラザパートナーズ　河崎由紀夫

秩父宮記念公園を訪ふ

うすぐらき桧の森を過ぎ行きてかしこみあふぐ茅葺の家
銅像のむかひたまへる富士山はをしからざらめや雲におほはる
うすびさしかすかに見えくる霊峰に友どちの声よろこびに満つ

武澤陽介

御殿場線に乗りて

山間ひのローカル線に揺られつつ合宿へ向かふ道ぞ楽しき

㈱まるぶん　高山広宣

秩父宮記念公園にて

目を閉ぢてひのきの森にたたずめば鳥のさへづりに心安まる

熊本県立熊本高校教諭　久保田　真

大日方学先輩が亡くなられて

「こんにちは」と挨拶したき先輩はなし合宿ごとに姿ありしに
新しき友の来たりて学びたしと語る姿の生き生きとして
日の本に共に生まれし友どちと学びゆきなむ道を求めて
つたなかる学びになるやしれねども見守りたまへ我らの学びを

第二十四班

ＳＩＳ㈱　内田厳彦

現し世に拝し得ざりし（秩父）宮様の御写真
親しく見ることを得し
御顔は昭和の天皇に似給へり凛々しき御顔太き御眉

日章工業㈱　藤新成信

長谷川三千子先生のご講義を拝聴して
天と地を統べをさめたる日の本の神の話をありがたく聞く

元地方公務員　井原　稔

去年の夏共に学びし友どちとまた会ひえたることぞうれしき
雨やみて木々の緑もさはやかにのぞむ山なみ霧薄れゆく
やみたると思へばまたも雨降りて黒き雨雲疾く流れゆく

祐誠高校教諭　小林国平

教へ子二人の合宿参加
それぞれに遠路遥々御殿場にて顔を合はすは嬉しきばかり

㈱柴田　柴田悌輔

長谷川三千子先生の講義を聞きて
ほがらかに笑みたたへつつ語りつぐ師のみ話に聞きほれにけり
神話をば受け伝へける祖先らの心偲べば有難きかな

三菱地所㈱　青山直幸

秩父宮記念公園にて
うつさうと生ひしひのきの森の果に茅葺屋根の見えて来りぬ
茅葺の母屋おほふがに生ひ立てるしだれざくらの姿優しき
胸のやまひいやさむが為十年余の月日過ごさるる御殿場の地に
会津藩主の家系に生れし妃殿下となかむつまじく過ごしたまふ宮は
国民のスポーツ振興願ひつつ自ら山野を歩きたまひき
暗雲のたれこめゆきし世の様を憂ひたまへる御心偲ばゆ

第二十五班

元新潟工科大学教授　大岡　弘

長谷川三千子先生の御講義をお聴きして
我らいま神話をなほも生くるべき民族なるを示し給ひぬ

熊本市役所　折田豊生

長谷川三千子先生の御講義を拝聴して
玉剣鏡の神器にみ祖らが込め給ひたるみ心を思ふ
つばらかにふるごとぶみのふみ示し説き給ふなりみ声やさしく
八俣のをろち天の岩戸の物語神々の世もままならざりき
神々も生長し給ふと説かるるを目を覚まさるる思ひして聴く
人の心も鏡のごとく澄みてあれと聴くに清しき思ひするかな

秩父宮記念公園散策
大檜並み立つ園は千万の草木群れ生ひ緑豊けしユーモアにあふるるガイドの説明に笑みを浮かべて聴き入る友らと
茅葺きの邸宅前の大桜春の盛りを想ひつつ見る若き日の宮の銅像向き給ふ彼方に富士の望まるるとふ

第三十一班

天本和馬

与謝野晶子「佐久間大尉を傷む歌」を読みて
武夫の生命を懸けし文を見ていやつぎつぎに歌詠み給ふ
ますら男と又武夫と詠ひたる悲しき思ひの連なりてあり
武夫の道かなしきと詠ひたる女史の心の我にせまりく

内山慶子

長谷川三千子先生のご講義を聞きて

編れたる古事記はそのままに古へ心を今に伝へり

つぎつぎに成る神たちの御心を説きしお姿心魅かるる

日本語教師　鈴木のり子

いくたびも富士の姿を求めつつ吾子と車を走らせにけり

山かげゆ現はれし富士に歓声あげし幼き頃の姿なつかし

冬空に真白く冴ゆる富士の峰に弱き心も励まされけり

来む秋に異国に発つ吾子と二人睦月の一日富士を拝みぬ

篠塚豊子

歌詠まんと感動を探して

川沿ひの夜桜のもと君とゐて空に望月輝きにける

常になく言葉えらびて語る君にわが心根は高まりにけり

（一社）福岡中小企業経営者協会　横尾仁美

大きなるしだれ桜の風受けて枝もそよぎてふくらみにけり

北九州市小学校講師　西山志織

秩父宮記念公園帰り際に

富士の嶺あるとおぼしき遠つ方眺めて待てば山の端見え来る

わづかでも山の端見えて友どちと喜び語らひ写真にをさむ

昭和音楽大学名誉教授　國武忠彦

風吹けばゆらぐ木の葉も楽しげに白雲光り流れゆくかな

杉の木はひときは高くそびえ立ち風にゆらぎて美しきかな

第三十二班

中島法律事務所　中島繁樹

御殿場の里の林のヒノキ樹は高くますぐに立ち並びをり

富士山を望む広野に茅葺きの宮邸いまも静かに建てり

華泉書道会　坂本和代

雨上がり桧の小径ふみしめて班友との会話楽しくはづむ

光さす雲におほはるる富士山をあかず眺めて和歌詠みできず

（公財）郷学研修所・安岡正篤記念館　嶋田元子

ひのき道歩みてゆけば茅葺の宮のみ住まひ目に入りくる

宗教法人太成殿本宮　髙見澤玉江

宮様の試験場と慕はれぬ富士山望む農事の園は宝永の噴火によりて飛びて来し黒き砂地を今踏みしめる

（一社）福岡中小企業経営者協会　福元晶子

けふもまた雲のかかれる富士山を一目見たしと思ひはつのる

日本青年協議会　椛島明実

昭和天皇から秩父宮様に贈られし

銅像を拝し、当時の宮様をお偲びして

兄上を支へ得ずして悲しみにありつつ側にたたずみ給ふ

宮様の悲しきみ心お偲びしそっと手を添ふみ像の上に

和歌散策

いづこやと空見上ぐれど富士山は姿を見せず厚き雲あり

白雲の山の形に変はりきて富士の姿の現れにけり

雲厚くおほはれつつも堂々と「ここにをるぞ！」と伝へをるかな

富士山は雲に隠れつ堂々の姿を見せり光差し来て

元福岡県公立小学校教諭　久米由美子

三十余年ぶり合宿に参加して

若き日の面影残る先輩に久方ぶりに会ふは嬉しき
三十余年経れど集ひは変りなく老いも若きも学びあひけり
若き日にみ教へ受けし師の君のみ姿見えずさびしかりけり

秩父宮記念公園にて

国思ひ陛下思ひてみまかりましし秩父の宮のみ住居静けし
富士山に向ひて若き宮様の銅像まさに動き出すがに

元皇宮警察本部長　小田村初男

御殿場合宿にて山口秀範先生の御講義をお聞きして

各家に訓へあるごと国にても貴き訓へあるとのたまふ
帝より下し賜へる勅語には守りゆくべき訓へありけり

国民文化研究会

（公社）国民文化研究会　理事長　今林賢郁

往にし日に殿下妃殿下住み給ふ名を留めたる記念公園
止みたりと思へばかすかに小雨ふる小径を友らとそぞろ歩きぬ
茅葺の母屋に入れば終戦の放送（玉音放送）聴かれし部屋（西の間）もありけり

（二回目の作品）

若きらにわれらが願ひ届けんと歩み努めて六十年経ちぬ
時により緩むこころを打ち払ひ友らと励みし日々にてありき
とことはのみ国の弥栄念じつつこの年月を生きて来たりぬ
「極まればまた蘇る道」ありと思ひて進まんわれらが努めに

拓殖大学日本文化研究所客員教授　山内健生

秩父宮記念公園にて

またしても降りくる雨にすべもなく傘を開きて歩み始めぬ
朴とつなガイドの案内を聞きをれば雨の上がりて吹く風冷涼し
雨もよひの木立を抜くれば鮮やかなマリーゴールドの花の目に入る
家族連れの人らも歩む宮様をしのぶ公園静かなりけり

㈱寺子屋モデル　山口秀範

友

懐しき友ら集ひぬ三人四人思ひがけざる顔も交じりて
外国の長き務めをねぎらひて語らふ一時心和むも

講義にて

友を得よ良き友持てと若きらへ講義の終りに訴へにけり
誇らしき我が友ありと告ぐるとき覚えず胸のこみ上げて来ぬ
勅語なる「朋友相信じ」さながらに生くるは楽しみ国支へて

（二回目の作品）

理事長の閉会式ご挨拶

かつて師の立たれし如く壇上に合宿四日を振り返ります
集ひ来し数日前すら遼遠に思はざるやと問ひかけませり
若きらへかんで含める口調にて講義内容たどらるるかな
それぞれの講師の思ひは期せずしてつながり補なひ響き合ひぬと
得し知識そのままにせず学び合ひ己が言葉を持てと諭せり
師のみ教へ継ぎて勉むる理事長を盛り立て行かむ心寄せつつ

東京大学教授　伊藤哲朗

四十数年振りの御殿場の地での合宿に臨みて

若き日に共に学びし御殿場に再び友と学ぶぞ嬉し
卒業を前に互ひに励ましつ学びし事ども思ひ出さるる
それぞれの道は違へど御殿場で学びし思ひいや忘れめや

秩父宮記念公園にて

霧雨に煙りし庭の雨上がり霧霽れ渡り薄日射し来ぬ
霧晴れて遠き雲居ゆ光射し流るる雲間に富士山の見ゆ
聳え立つ富士の山塊雲湧きて嶺にかかれる雲流れをり

運営本部

FTIコンサルティング　伊藤俊介

合宿教室開催

運営の大任を受けはや一年つひに開催初日を迎ふる
続々と集ふ友らや先輩の「お疲れ様」の言葉ぞ嬉し
ありがたき言葉嬉しと思ひつつ任の重さをあらためて感ず
参加者が「来て良かった」と思へるやう運営諸事に心尽くさむ

（二回目の作品）

合宿を終へ参加者を見送りし折
四日間共に学びし仲間らと別れを惜しみ手握り交はす
満員の参加者を乗せ路線バスは御殿場駅へと走り始むる
振り返りつ我に手を振る仲間らの皆笑み給ふを見るぞ嬉しき

西松建設㈱　蔭山武志

長谷川三千子先生の講義を聴講して
神々の時代より連なる我が国の伝統をここで改めて思ふ

指揮班

㈱IHIエアロスペース　内海勝彦

合宿教室指揮班となりて

指揮班のあまたの仕事次々にいやましにけり
日を追ふごとに
あれこれとなすべき事の生まれきて思ひめぐらし中々寝ねず
還暦の我にしあれど若きらの力を借りてつとめ果さむ

（二回目の作品）

合宿最終日

終はりまで雨雲おほひ富士山の姿仰げず口惜しきかな
やうやうに長雨もやみて山すそのわづかに見ゆる今日のあしたは
いつの日かまた御殿場に集ひきて富士のたかねを皆と眺めむ

元神奈川県立小田原高校教諭　原川猛雄

友どちと語らひつつも合宿の資料づくりに励む楽しさ
なつかしき友らと会ひて相共に資料をつくる作業も楽し

猪部さん（元小学校校長）のお話をうかがひて

子供らの荒みし学び舎を勇気もて正しき道に戻されしといふ
むつかしき環境にても挫けずに立ち向かはれしお姿たふとし

若築建設㈱　池松伸典

しとしとと小雨続きて富士の嶺の姿見えぬは口惜しきかな
窓の外の明るさませば外に出て富士のすそ野

の見え初めにけり
友ら今秩父宮公園に見え初むる富士の姿を眺めをるらむ

㈱寺子屋モデル　横畑雄基

秩父宮記念公園散策

ネクタイに上着姿にゲートルを巻きて登らるる宮様の像
三日間この地に居れど富士山の姿をのぞむことのなかりき

（二回目の作品）

六十回合宿教室を運営す

若き日に共に学びたる仲間らとこの一年の準備任さる
富士の峰に集ふ人らを支ふべくこの一年は心割きたり
様々の難題生ずるも委員長の差配によりて事は進めり
三泊四日強いて言ふなら富士山の全姿見へぬが唯無念なり

伊佐ホームズ㈱　小柳雄平

茅葺の大屋根かづく家を見つ庭に雄々しく座す姿がに
門につづく黒砂利道の両脇の桧の森に日の射しそむる
雨やみて晴れ間のさせば木々の間ゆ白雲立ちあぐ山々の見ゆ

（二回目の作品）

直会によせて

合宿の運営委員長を務めたるわが先輩のひとせのいたつき如何ばかりかな
参加者の喜ぶ合宿と成しましき先輩はうま酒飲み給ふらむ
残りたる友らとうまき酒を飲み笑ひの声を響かせますらむ

事務局

（公社）国民文化研究会

事務局長　奥富修一

長谷川三千子先生のご講義をお聞きして丁寧に解きほぐすごと語り給ふ師のみ言葉に時を忘れき
神代より伝はり来たる言の葉に包まれ生きる幸をしぞ思ふ
心とは鏡なりとのみ教へのわが身に沁みて胸熱くなる

（二回目の作品）

合宿事務局の仕事を終へて

合宿の全ての日程終へたれば過ぎ来しひととせ浮かびくるかな
常よりも良き合宿との言の葉を聞けば疲れも癒やさるるがに
思はざる事の起これど友皆の篤き情けに乗り越えて来ぬ

元日商岩井㈱　澤部壽孫

黒雲の天を覆へばまなかひに富士の高嶺の見えずくやしき
北南西と東の師と友も朝夕思ひを馳せ給ふらむ病ひゆゑ集ひ得ざりし友ら皆恙なかれと祈りますらむ
五十年を経て合宿に来たれりと友は語りぬ懐かしみつつ（河合忠雄兄）
幾十年会はざりし友と語り合ふ昨日会ひたる心地こそして（川井泰彦兄）

秩父宮記念公園散策

丈高きヒノキ並み立つ森中の小路歩めば霧雨の降る
橙と黄色の花つけアフリカンマリーゴールド群れ咲くを見つ
三本のしだれ桜のかたはらに茅葺き平屋の美しく立つ

（二回目の作品）

富士山の姿仰げず合宿を終ふると思へば申し訳なし
大学に戻りて学びを続けむとの若き友らの言

葉頼もし
忙しきあひまを割きてひとときを集ひくれた
る友らを思ふ
いつどこに居てもみ国を忘れざる友ありと思
へば何嘆かむや
ただの会ひはせずともよしや会はずとも心の
通ふ友らありせば

元川崎重工業㈱　山本博資

山口秀範兄の講義を聞きて
伝へたき思ひあふるる言の葉はしらべとなり
て胸に迫りく

長谷川三千子先生の御講義を聞きて
いにしへゆ語りきたりしくさぐさを文字にて
のこせしいとなみたふとし
古事の記はこの世のたからなり思ひとどめて
ゆめ忘るまじ
師の君は「三種の神器」をとき給ふこれを生
きるがわれらのつとめと

秩父宮記念公園散策
十年余りを富士の裾野のこの地にて過ごし給
ひし殿下の偲ばる
さはやかに真直ぐに立てるヒノ木樹の林美し
仰ぎ見進むも
み園にはアフリカン・マリーゴールド咲きほ
こりめでつつ歩き草花楽しむ
富士の嶺に向ひて立てる銅像は巨匠（彫刻家
朝倉文夫）の手になり生きるがに見ゆ

（二回目の作品）

富士が嶺に雲寄りきたりきのふけふみること
かなはず心残りき
朝な朝な集ひの庭ゆ仰げども富士の姿は見え
ず過ぎにし
蒼天に聳ゆる富士の霊峰を想ひ描きしことの
悔まる

元㈱講談社　磯貝保博

久びさに動かぬ雲の流れ出し青空みえて心あ
からむ
山裾をおほひし雲も払はれて雄々しき富士の
あらはれにけり

元㈱三菱重工業　島津正數

山口秀範先生の御講義を拝聴して
熱き思ひを語り給へる師の君の御顔を撮らむ
とシャッターを押す
目頭を熱くされつつ語らるる講師の思ひひた
に伝はる

秩父宮記念公園を訪ねて
富士箱根愛鷹三山にちなみたる三峰窯を今日
訪ねけり
スポーツを愛好されたる宮様のリュック姿の
銅像の立つ
富士山のいただき見上ぐる宮様のリュック姿
の銅像は立つ

（二回目の作品）

小柳志乃夫先生の講義を聴きて
まがごとの起りし度にすめろぎは民や如何に
と思ひ馳せ給ふ
あまたなる国はあれども君民の一和の国は我
が国のみならむ
民草の上安かれと祈らるるすめろぎの御製に
胸熱くなりぬ

北九州市立医療センター　森田仁士

山根清兄を偲びて
国守るつとめ荷ひしますらをの書読みゆけば
君の偲ばゆ
君あらばあまたの話し聴けむものをガンに倒
れし君のをしまる
年一度合宿の地に集ひ行けば君の笑顔の迎へ
くれしに
江田島の教育館を若きらに見せまほしきと努
めし君は

（二回目の作品）

最知浩一兄へ
少しでも役立ちたしと集ひくれし君の心のた
だありがたし
次々と心めぐらし気付きたる事テキパキとさ

ばく君なり

医療法人ＩＭＳグループ本部　最知浩一

初めて御殿場合宿に参加して
若きよりともに学びし友達と今年も集ひぬ富士の裾野に
六十年の長きにわたり続き来し学びの道のありがたきかな
少しでも役に立ちたしこれからも学びの集ひ続くかぎりは

北濱　道

伊藤俊介合宿運営委員長挨拶

上座下座違ひのあるを米国の若き社員に君説きにきと
知らざればつゆわからざるお互ひの文化の違ひに気づかされけり
わかりやすく又伸びやかに語りゆく君名づけらる〝ミスタージャパン〟と
日の本の文化を学ぶ我々の心整ふ君の話は

（二回目の作品）

山口秀範先輩の御講義にて昭和天皇の御姿を拝し
猛鳥の襲ふを身をもて庇ひます親鳥のかなしき姿偲ばゆ
祖父君の諭し給ひしおさとしのお心深く刻まれましけむと（教育勅語）
昭和天皇のかなしき御姿切々と話し給へば胸熱くなる

同杉浦重剛御進講のペルシャ人の話を聞きて
屠りたる豚の血の垂る袋もて街を歩めば人ら見返る
「どうしたか早く入れ」と友達は我を忘れて招き入れしと
助けくれし友達の様先輩はこころをこめて話し給ひぬ
生涯の友を得たりて帰れとの先輩のお言葉胸をつらぬく

㈱ラック　高橋俊太郎

傘を出し私のために買ってきたとの言葉を聞けばただ有難し
高木兄の何も聞かずに用意せし気づかひ知れば嬉しかりけり

（公社）国民文化研究会

事務員　栗方恵美子

雲中に隠れし姿を想ひつつ晴れよと願ふ富士の裾野に

合宿地に寄せられし歌

下関市　寶邉正久

御殿場合宿へ（八月三十一日）

富士を仰ぎ新しき御代に生きむとす学びの友らさきくあれかし
戦ひと平和と一貫つながりて生きむとしたりああ合宿六十年

（公社）国民文化研究会

前理事長　上村和男

まむかひに霊峰富士をあふぎみつつわれらのつどひおこなはれんとす
難き病につどひの庭にゆけぬ身をくやしくおもひ悲しみに満つ

中野区　板東一男

学生の数は少なくなりたれど思ひの深さに合宿はなる

函館市　大町憲朗

國のため命ささげし先達をみ祭る集ひの近づきにけり
友どちの集ふ力は祖先らのみ魂に通ひ國守るらむ
夏の日の集ひに我も山河越え北の里より加はる心地す

あとがき

初冬の候、皆様にはその後如何お過しでせうか。御殿場市「国立中央青少年交流の家」で共に学び、語り合った「合宿教室」から早三ヶ月が過ぎました。この度やうやくこの「感想文集」を皆様のお手元にお届け出来る運びとなりました。この「感想文集」は、「合宿教室」の最後に走り書きしていただいた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長の方々に、感想文と第二回目の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人のお心こもる文章・短歌を丹念に読み返し、編集することは、神経、時間の掛かる作業ではありますが、お一人お一人のみづみづしい心の動きをお偲びできる、心楽しく嬉しい時間でした。

本感想文集編集方針は以下の通りです。

一　「感想文」について

執筆者のお心のうちが最もよく表れてゐる箇所を摘要し、表題も付けました。逆に文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持ちを辿りながら、原文のニュアンスが損はれないやう加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字および文法上の誤りについては訂正してをります。

二　「短歌」について

合宿では二回にわたって短歌を作りましたが、第一回目のものは班別相互批評にて添削され、全参加者それぞれ一首以上をもれなく巻末の「短歌詠草」に収めました。また、感想文の執筆の折に作っていただいた第二回目の短歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。こちらの表記は全員歴史的かなづかひに統一し、文法上の誤り等は感想文と同様に訂正いたしました。

この「感想文集」作成のためには、班長の方々以外にも多くのご協力を頂きました。お忙しい生業の傍らご協力いただきました池松伸典、坂本芳明、穴井宏明、武田有朋、濱崎史嘉、佐野宣志、の各氏に心より御礼申し上げます。

カメラ・レポートの写真は島津正數さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご協力によって出来上がった「感想文集」を、ご精読下さいますやう切願いたします。

本文集を読み進むにつれて、「合宿教室」の様々な感動が鮮明に甦ってくる事と存じます。お読みの後は、是非とも班長、班付、班友、更には他班の方へも、一筆お便りを差し上げていただき、今後も互ひに励まし合ひ学んでゆくことができますことを願ってやみません。

（北濱　道　記）

〔資料〕六十周年記念出版
第六十回〝合宿教室（富士）〟感想文集
非売品
平成二十七年十二月二十五日発行
編集兼発行者
公益社団法人　国民文化研究会
理事長　今林賢郁
編集　北濱道・佐野宜志
東京都渋谷区東一―十三―一―四〇二号
〒一五〇―〇〇一一
電話　〇三―五四六八―六二三〇
FAX　〇三―五四六八―一四七〇